

あなたも新石器時代の人間に!

パヴェウ・ビエルナツキ
クラクフ 紀元前 12025 年

はじめに

親愛なる読者の皆様、私たち全員に大きな変革が待ち受けています！間もなく到来する世界では、ただ生き延びるだけでは不十分です。私たちは皆、適応しなければならないのです！この小さなガイドブックは、まさにあなた方、私の親愛なる同胞たちのために書かれたものであり、新たな挑戦に立ち向かえるようにするためのものです。本書には、ある現象に関するいくつかの考察を盛り込みました。その多くは、日常生活から取った例を用いて裏付けしています。本書の最後には、ここに書かれた内容をどの程度理解できたかを簡単に確認できるテストを載せています。また、これから習得すべき概念の世界へ、徐々に皆さんを導いていきます。これから何を目指すべきか、そしてどのように考えることを学ばなければならないかをお伝えします。おそらく、「一体全体、これの何の意味があるの？」と疑問に思うでしょう。結局のところ、誰もが自分の好きなように考えているのだから……。しかし、この本を読み、そのメッセージを理解するために少し努力を払えば、これからは全く違う世界になることが、あなたにとって自明のこととなるでしょう！

新石器時代

きっと皆さんはすでにこの言葉を耳にしたことがあるでしょう——ネオリト。その意味が気になっているかもしれません。それは間違いです！ネオリトは私たちの未来そのものです。それはマンモスよりも強大で、剣歯虎よりも危険なのです！ネオリトから逃れることはできません！ネオリトは私たち全員に、世界を見る新たな視点、考える新たな方法を求めています。もはや「興味がある」だけでは不十分です！あなた方——未来のネオリトの人々は、そうなりたいと強く願わなければなりません！古い習慣や古い慣習を捨て去らなければなりません。私があなた方を連れて行くこの道を共に歩み終えた時、その先で、今のような考え方をしてきたことが信じられなくなるでしょう！まず第一に、そして最も重要なこととして——新しい言葉を覚えなさい。「パレオリト」だ。それは何のことか、と尋ねるだろうか？ そう、パレオリトとは、あなたや私のような、ごく普通の人々を指すのだ、親愛なる読者よ。私たちは皆、パレオリトの人間だ。そして、常にそうであった。太古の昔から、私たちはパレオリトの中で生きてきた。そうだとすれば、このまま続けていけばいいのでは……と、あなたは思ったことでしょうか。とんでもない。なぜですか？——と、きっと尋ねるでしょう。お答えしましょう。実は、旧石器時代は悪いのです！ずっとそうやって生きてきたのに、どうして悪いと言えるのか、とおっしゃるでしょう。悪いというわけではありませんが、旧石器時代は劣っているのです。もちろん、新石器時代よりも劣っているのです。

「なぜ劣っているのか？」とあなたは問うでしょう。私自身、私たち皆——ごく普通の狩猟採集民が常に旧石器時代を生き抜いてきたと認めているのに、なぜそれが新石器時代よりも劣っているのでしょうか？ さて、そのような質問そのものが、旧石器時代がどれほど深くあなたの脳裏に食い込んでいるかを物語っているのです！真の新石器時代が到来すれば、そんな質問を口にすることさえ誰の頭にも浮かばないだろう！保証する。新石器時代の普通の人間なら誰にとっても、自分がより優れた人間であることは自明の理となるのだ！

「人間は皆同じ人間なのだから、どうしてある人間が別の人間より優れているなどと言えるのか」と、あなたは言うだろう。しかし、あなたがたがそもそもそのような考え方をできるということ自体が、あなたがたがまだ新石器時代の人間ではないことを証明している。あなたがたは彼らには程遠い。例を挙げて説明しよう。狩りたての鹿の肉と、例えば数日前に死んだマンモスの死骸の残り物と、どちらが優れているだろうか？ もちろん、狩りたての鹿の肉の方が美味しいに決まっている！同じ理屈で、新石器時代は旧石器時代より優れており、新石器時代の人間は私たち一人ひとりよりも優れているのだ！しかし、それだけではない。君たちは、自分たちが劣っているという事実をただ受け入れて、狩りに行くなんてことはできない。とんでもない！新石器時代は、君たち一人ひとりにある種の義務を課しているのだ！それはまるで、火を絶やさないように維持するという任務を負っているようなものだ。一度消えてしまった火を再び起こすのは難しいし、維持するほうがずっと賢明だからだ。そして、火が消えてしまえば手遅れだ。焚き火に薪をくべることは、シャーマンが洞窟で偶然クマに出くわした時に唱える魔法の呪文と同じくらい役に立たない。皆も知っているだろうが、クマは魔法など知らないし、そんなシャーマンの味は、他の人間と何ら変わりなく美味しいに違いない。狩猟においてシャーマンは何をするのか？他の人々と同じく、動物を狩

り、自分自身が狩られないように努めるのだ！ きっと信じてもらえないだろうが、新石器時代になれば、シャーマンたちは全く狩りをしない！ 「魚を釣るんだろう」とか、「せめて果物やキノコを採るんだろう」と思うかもしれない。そんなことない！ 新石器時代のシャーマンは、何もしないんだ！ 「何もしないなんてありえるのか」と聞くかもしれない。だって、誰にでも自分の仕事ややるべきことがあるはずだ。昔からずっとそうだったじゃないか！ じゃあ、彼らは何を食べるんだ？ シャーマンは何で生きていくんだ？ 新石器時代のシャーマンは、自分が「より優れている」という事実だけで生きていくんだ！ そして、君たち一人ひとりが、新石器時代の本質を理解した時、自分も「より優れている」存在になりたいと願わなければならない！ 最高に！ そのことを夢見なければならないんだ！ 今よりも優れた人間になること以外、何も夢見ないだろう！ なぜなら新石器時代において、優れた者は狩りをする必要など全くなく、毛むくじらのサイのようなお腹を持つことになるからだ！ わかっている、互いに顔を見合わせ、そんなお腹が誰に必要なのかと思っているだろう？ だって、そんなお腹の人はいないし、狩りや他の多くの活動に邪魔になるだろう。君たちが何を考えているか分かっている！ その馬鹿げた顔を見れば分かる！ また、キャンプに戻って、そこで自分の女と好き放題にやりたいことばかり考えているんだな。新石器時代がすべてを変える。これまでは、そんな女性を口説き落とし、自分が狩りができることを見せつけなければならなかった。そして彼女は、この男かあの男か、自分で選ぶことができた。もちろん、それは変わる！ 新石器時代には、女には何も言う権利がない！ 何を言ってるんだ、女に何も言わせないだと？ まさか新石器時代に女がいなくなるって言うのか？ そうじゃない、女はいるんだ。ただ、女の代わりに彼女の父親が決めるんだ。父親が、誰の方が彼女にふさわしいか、彼女に言い聞かせるんだ！ もう、彼女に贈り物——例えば肉や動物の皮——を持っていくようなことはなくなる。とんでもない！ いや、確かに肉は持っていかなければならないし、今より多く持っていくことさえあるかもしれないが、それを渡す相手は彼女ではなく、彼女の父親だ！ そして、彼女のことについては、彼女本人ではなく、父親と話し合わなければならない！ さて、もし誰かがたくさん娘を持っていたら？ ——と君たちは尋ねるだろう。なぜそんなに多くの肉が必要なのか？ 一人で全部食べるなんて無理だろう！ シャーマンのことは忘れたのか？ 娘の父親は、誰が娘にとってより良い候補者なのか、どうやって知るというのか？ 「娘自身で決められないなら、父親が自分で決める」という、その誤った旧石器時代の考え方が、あなたたちの中に根付いているのだ。新石器時代には、誰も、何についても、独断で決めることはない！ じゃあ、娘が誰を選ぶべきか、父親はどうやって知るんだ？ もちろん、自分より優れた者に尋ねるに決まっている！ そしてその者は、さらに優れた者に尋ねる！ そうやって連鎖していく。そして、頂点に立つ、最も重要なシャーマンであり首長である彼が、ようやく彼らにそれを許すんだ。また何を考えているんだ（君たちのあの馬鹿げた笑顔を見れば、すぐに分かるよ！）。

他の人たち

時折、私たちは「彼ら」と出会う。まあ、人生とはそういうものだ。時には我々が彼らに肉を分け与え、時には彼らが我々に分け与えてくれる。結局のところ、狩りがいつもまくいくとは限らないからだ。時には一緒に狩りをする事さえある。だが、彼らには目を光らせておくのが賢明だ。なぜなら、彼らは時折我々の女性をさらうのが好きで、その女性は、本来期待されるような必死の抵抗を全く見せないからだ。まあ、我々も彼らの女性を連れ去るのが好きだ。だが、そうではない。また君たちの馬鹿げた顔を見れば、何かの「おばさん」が、他者たちに連れ去られることだけを夢見ているという冗談が頭に浮かんでいるのが分かる。冗談の話なら、それさえも変わるだろう。ネオリタでは、君たちが知っているような形のジョークは存在しない。君たちのようなジョークはもう誰も笑わないだろう！おそらく完全に禁止されるに違いない！その代わり、「他者」に関するジョークは面白いものになるだろう。なぜか、と尋ねるだろうか？それは非常に単純なことで、もしこのガイドの第一章を注意深く読んでいれば、あなた自身も気づいただろう。つまり、ネオリットの人々にとっては、「他者」についてジョークを言うことは許されるばかりか、むしろそうすべきだということが明白になるのだ。なぜなら、「他者」はネオリットにおいて、私たちよりも劣った存在になるからだ！真のネオリットの間人は、例えば「他者たちは意地悪な人食い人間で、しかも味も最悪だ」と言われたら、その両方を何の疑問も抱かずに信じてしまうだろう！彼は、自分がずっとそう考えていたのだとさえ感じ、それが自分の意見であり、例えば焚き火のそばで誰かに教えられたことではないとさえ思うだろう。たとえ「他者」を一度も目にしたことがなく、ましてや口にしたことなど一度もないとしても、彼はそう考えるだろう。そう言われれば、彼はかつて何か不味いものを食べたことがあり、それがまさに「他者」だったに違いないと、ただ想像するだけだ！あるいは、彼自身が「異種族に部族全員を食い尽くされたが、もうこれ以上食べられなくなったせいで、自分だけが助かった」といった話を語り出すかもしれない！もうこれ以上食べられない人間なんて、見たことがあるか？人生で一度も見たことがないだろう！だって、私たちはいつも少しは空腹なのだから。たとえマンモスが獲れたとしても、全部食べてしまうわけにはいかない。他の人々のために残さなければならないし、後で食べるために肉を少し乾燥させておかなければならない……しかし、繰り返すが、真の新石器時代の人間なら誰でも、何よりもまず自分一人ですべて食べようとするものだ！このことを、その旧石器時代の頭の中にしっかりと叩き込んでおけ！他人は存在しない！他人は劣っている！これは、私がこの話を始めた時の「他者」たちだけに限った話ではない。それは、もし彼らがあなたたちより劣っているのなら、あなたたちの部族の人々にも当てはまるのだ！では、新石器時代はあなたたちに極端な利己主義を求めているということか？新石器時代において、今こうして立っているお前たちは、互いに野生の豚のように振る舞うことになる、と私が言いたいのか？それは単なる解釈の問題だ。単純な旧石器時代の狩猟採集民の視点から見れば、そう見えるかもしれない。しかし、新石器時代とは高貴な概念であり、利己主義とは何の関係もない。重要なのは、誰のことを第一に考えるか、ということです。誰のために自分の口から食べ物を減らすのか！普通の狩猟採集民として、皆さんは自分の部族、女性や子供たち、そして特に狩りができなくなった部族の

長老たちのことを気にかけていました。他の狩人たちのことさえも気にかけていたのです。何しろ、皆さんは本能的に他の人と食べ物を分かち合っていたのですから。あなた方の旧石器時代の脳裏には、彼らはあなた方と同じ人間だが、ただ子供か老人か、あるいは女性であるだけだという考えが根強く残っている。もちろん、これは変わるのだ！新石器時代の真の人間としてのあなたの主な任務は、あなたより優れた者たちの繁栄を顧みることです！誰があなたより優れているのか？それはすでに説明しました——新石器時代において、あなたより優れているのは、狩りをしなくてもよい部族の仲間たちです！「より優れている」というだけで生計を立てている者たちだ！君たちが狩った獲物の肉は、すべて彼らに帰属する！君たちにその中から小さな切れ端を分け与えるか、それとも君たちをダイエットさせ続けるかは、彼らが決めるのだ。新石器時代には、君たちが夢にも思わなかったほどの食料の余剰が生じるだろう！食べ物が山ほどあるのだ！もしそれを均等に分け合えば、誰もが、旧石器時代の普通の人間なら体に害が出るほど、たくさん食べることができるはずだ！食べ物があまりにも多すぎて、もし均等に分け合えば、あの大食漢でさえ「もうこれ以上は食べられない」と言うだろう！彼は穏やかで優しい人だし、みんなもよく知っているだろうが、そんな状況で腹いっぱい食べている彼に、もし誰かが思わず何かを勧めてしまったら、どうなるか想像したくもない！新石器時代には、それほど多くの食べ物があるのだ！「ネオリットって良さそうだし、試してみるべきかな？」と思っているだろう？もちろん、ネオリットには良い面もある。しかし、そこには独自の特性があり、それが「優れた者たち」にとってのみ有益なものにしているのだ！だって、もし食べ物を均等に分け合っていたら、優れた者たちが「より優れる」よう努力する理由は何一つないだろう！新石器時代の食糧が、いつの日か均等に分配されるなんて、頭から追い出せ！君たちのことはよく知っている。そうなれば、君たちは何ヶ月もキャンプにこもり、狩りに行く気など微塵も起きないだろう！食糧がたっぷりあるなら、なぜ狩りをしなければならないのか、そう思うだろう？真の新石器時代の人間は、決してそんなふうには考えない。新石器時代の人間は、できるだけ多くを手に入れたいのだ！しかし、単に多くを持つことだけが目的ではない。彼にとって、自分より劣る者たちができるだけ少なくしか持たないことほど重要なことはないのだ！彼の夢は、彼らが全く何も持たないことにある！新石器時代の人間が、彼らと分け合いたいと願っていると思うか？とんでもない！新石器時代の人間が、もし誰かと分け合おうものなら、もはや新石器時代の人間ではなくなってしまう！あなたたちのような、ただの狩猟採集民に対する優位性をすべて失ってしまうのだ。あなたたちより少しも優れていなくなる！重要なのは、食料を分け合うという、破滅的な旧石器時代の習慣を断ち切ることなのだ！「そんなことあり得ない」とあなたは言うだろう。だって、人々は分け合っているじゃないか？あなたの時代遅れの旧石器時代の思考の誤りを、説明してやろう。あなたは本能的に、もし食料を分け合わなければ、例えば誰かが餓死してしまうのではないかと恐れているのではないか？そして、もし誰かが死んでしまえば、その人はもう狩りを手伝ってくれず、あなたたちと分け合うこともできなくなる——そう考えているでしょう、私の言う通りですよ？もしあなたの部族全体で、かろうじて1ヶ月かけてマンモス1頭を食べきれぬ程度だったなら、そのような考え方には意味があったのです。この旧石器時代の「食料を分け合う」という迷信は、ただ一つの理由から生まれたのです。それは、一つの部族に属する人々の数が少なかったからです。た

だそれだけの理由で、あなた方の心の中に、この恐怖、他者を助けなければならないという旧石器時代の欲求がくすぶっているのです。しかし、新石器時代のおかげで、もうすぐ人間はとてつもなく、とてつもなく多くなる！そこには、あなたたちの頭にある髪の毛の数ほどの人々が集まる集落ができるだろう！そうなれば、誰とも食料を分け合う意味など、もうないのだ！新石器時代の善良な一般人は、もしあなたがたのうち誰かが飢え死にしそうになっているのを見ても、ただ立ち尽くしてそれを見ているだけだろう！もちろん、その間においしいものを頬張っているとは言わない。だって、それを奪われるのを恐れているからだ。しかし、もし彼が落ち着いていて、例えばあなたがたにはそれができないと分かれば、彼は特に美味しそうな一口を取り出し、それを堪能するかもしれない！そうすることで、彼は自分自身の目にも、そしてあなたがたの目にも、自分の立場を強調するのだ！彼は、自分があなたがたより優れていることを示すのだ！もし他に誰かがあなたたちを観察していたとしても、たとえ空腹でなくても、間違いなくそうするだろう！君たちは、彼ら、真の新石器時代の人々のように考えることを学ばなければならない。私の助言のおかげで新石器時代の人々になった時、飢え死にする人間の姿など、君たちには少しも気にならないだろう！君たちにとってそれは耐え難い光景だと私は知っているが、その事実は、君たちが何者であるかということだけに起因しているのだ！君たちはあまりにも長く旧石器時代の爪に囚われていた。それが君たちの精神に、まるで洞窟熊の爪のような傷跡を残してしまったのだ。何事も容易にはいかない、君たちもよく知っている通りだ。これには君たちからの少しの自制心、いや、むしろ「犠牲」さえ必要になるだろう。この、確かに最初は少々不快な光景に、徐々に慣れていくのが良い。弓を射るのと同じように、練習が必要だ。その際、まずは美味しいものを手に取っていることを想像し、そして——これは非常に重要だが——決して匂いを嗅がせてはならない。ある程度の腕前がいたら、実際に何かを取り出して匂いを嗅がせることさえできるようになりますが、もちろん味見はさせません。熊を狩りながら弓の射方を学ぶ人はいません！まずはカラスに矢を放つのです、皆さんもよくご存知でしょう！「年長者の話では、飢えで死んだ人はいないだろうに、どうやって練習すればいいのか」と尋ねるかもしれませんが。それはとても簡単です！新石器時代には、食料が余っているにもかかわらず、あなたがたがこれまで経験したことのないような飢餓が訪れるでしょう！あなたの両親も、あなたの両親の両親も経験したことのないような飢餓です！単に、食料を分け合うという、あの破滅的な旧石器時代の考えを、君たちの頭から叩き出すだけではない。新石器時代の成功は、誰もが真の新石器時代の人間になった時に初めて完全なものとなるのだ！飢え死にする者でさえ、やはり分け合う価値があるかもしれないなどとは考えられなくなるだろう。いや！彼は、自分の目の前で、例えば燻製魚の一切れを頬張っている奴が、飢え死にすることを夢見るだろう！その飢え死にしそうな奴は、燻製魚はいい匂いがしてとても美味しいのだから、自分一人でその燻製魚を食べられたらどんなに素晴らしいか、と想像するだろう！自分があの人と分け合うなんて、彼の頭には微塵も浮かばない！新石器時代の世界には、あなたたちのような人間はもう存在しないのだ！

タイトル

このガイドの章では、新石器時代の知恵の結晶である「称号」について取り上げます。「称号」とは何なのか、と疑問に思うかもしれません。称号とは、ある意味「名前」のようなものです。皆さん一人ひとりに名前があり、女性たちにも名前があります。小さな子供たちでさえ、遅かれ早かれ名前が与えられるでしょう。何しろ、彼らと呼ぶには何か名前が必要だからです。おそらく皆さんは、新石器時代には名前なんてないだろうと思っているでしょう。いいえ、ありますよ！新石器時代の人にとって、名前というのは非常に実用的なものです。例を挙げて説明しましょう。例えば、あなたの妻が何か食べ物を用意したとき、たいてい何と言いますか？「ご飯！」とか、そんな感じで大声で呼びますよね。さて、そんな呼びかけに誰がやってくるか？誰でもいいんだ！君たちもよく知っているだろう。実際、部族の半分くらいが集まるかもしれない。少なくとも、たまたま近くにいた連中はね。で、何が問題なんだって？君たちにとっては大したことじゃないかもしれないが、もし君たちが本物の新石器時代の人間になれたとしたらどうなるか、考えてみてほしい。例えば、お前、ビッグ・マウスを例に取ろう。もしお前が新石器時代について少しは知っていて、もしお前の女が「飯だ！」と大声で叫び始めたら、お前は どうする？部族全員の前で恥をかき前に、今すぐ教えてやるよ。早足で（走ってはいけないぞ！）彼女のところへ行き、思いっきりこっぴどく叱りつけるだろう！そしてこう問いたですんだ。「『ささやきの小川』はそんなに大声で叫ばなきゃいけないのか？誰かに聞かれるかもしれないじゃないか！もっと静かに、例えば俺の名前を呼んでくれれば済むことじゃないか？」と。君たちは頭をかき、また互いを見合わせ、何も理解できていないようだ。私が説明してやろう。君たちの女が食事を作った時、誰かがその食事に割り込めば、君たちの取り分は減るんだ！「どうせ後で誰かが分けてくれるから大丈夫」なんて思ってるだろうが、その考えを君たちの旧石器時代の頭から叩き出せ！真の新石器時代が到来すれば、誰も君たちに何も振る舞ってくれないぞ！君たちはきっと、この新石器時代なんて変だと思うだろう。誰も誰にも振る舞わないのか？だって、いつも友達や近所の人を招待していたじゃないか。誰にも振る舞わない、ということではない。新石器時代の人間は非常に社交的で、毎日誰かを食事に招くこともできるだろう。どうやら、ある微妙な違いについて説明しなければならないようだ。その違いは、彼が誰を招待するかという点にある！新石器時代の人間は、常に何よりもまず、自分より優れた人々を招待する。決して、絶対に、自分より劣る人間を招待することはない！この違いを理解することは極めて重要だ。同じ行為であっても、たとえガゼルの腿肉と一緒に食べようと誰かを招待するというような些細なことでも、より優れた人を招待するのか、それとも劣った人を招待するのかによって、賢明な行為にも愚かな行為にもなり得るのです。

ご覧の通り、新石器時代の人々も喜んで名前を使うでしょうが、それには深い理由があるのです。自分の名前を誰がつけたのか、考えたことはありますか？おそらく、多くの方はそれが誰だったかさえ覚えていないでしょう。そのような名前は自分で変えることもできるし、誰かが変えてくれることもあります。例えば、焚き火の周りで語り継ぐ価値のあることを成し遂げたり、洞窟の壁に描いたりするような場合です。しかし基本的に、名前をつけることができるのは誰でも構いません。その違いがもうお分かりでしょうか？ネオリットで

は、名前は「より優れた人々」によってのみ与えられるのです！すでにご存知の通り、他者より優れた人々はネオリットにおいて、たとえあなたの部族の長でさえ、もしその事実が彼に伝わったなら、あなた方一人ひとりと同様に、ただ呆然と立ち尽くすほどの権威を持つことになるでしょう。名前を授ける権利を持つのは、ネオリットの「優れた人間」だけであり、その者が「劣った人間」に名前を授けることになる。だが、一体何度まで人に名前を授けることができるのか？ 実のところ、一度で十分だろう。それでも、名前を授かった者は、それを誇りに思い、自慢するだろう。なぜなら、それを授けたのは「優れた者」だからだ。彼は、まるでその者が山ほどの食料をくれたかのように、名前を授けてくれた者に対して恩義を感じるだろう！しかし、その「優れた者」は、そんなことは何もしておらず、ただ名前を付けただけなのだ。そしてここで、称号の話になる。ご想像の通り、新石器時代において、称号も名前と同様に、誰にでも与えられるものではない。自分より劣った者から与えられた称号など、そもそも称号とは言えず、何の意味も持たない。一方、自分より優れた者から授けられた称号は、まるで焚き火で焼かれる肉の香りのように効くのだ！そんな称号のためなら、新石器時代の人間は地の果てまで行くだらう！君たちは驚いて、また互いを信じられないような目を見て、ここに必要なものはすべてあるのに、なぜ誰かが地の果てまで行く必要があるのか、と考えるだろう。実例を挙げて説明しよう。君たちは幼い頃から弓の射方を習い、上手い下手はあれど、誰もが弓を射ることができる。では、なぜそれができると分かるのか？「どうして分かるかって？ 弓を射るのが上手い人は、よく的を射抜くからさ！」と言うだろう。いや、むしろほぼ必ず、しかも遠くからでも！旧石器時代なら、そう考えることもできたでしょう。しかし、新石器時代の人々、繰り返しますが、新石器時代の人々にとって、例えば誰かより優れた人物から「百発百中の射手」という称号を与えられたなら、その人物があなたたち全員よりも弓の腕が優れていることは明らかです！またしても、彼はどのようにそれを知っているのかと疑問に思うことで、あの古い旧石器時代の過ちを犯しているのです。「彼がそう言っているのだから、何か理由があるに違いない」とあなたは考える。いいえ、違います。絶対に違います！たとえ彼が人生で一度も弓を射たことがなく、弓の引き方さえ知らなかったとしても、彼はそう思うでしょう！もし彼が、5歩先にある動かない的を狙ったとしたら、1年射ち続けても一度も当たらなかったら。それでも彼は、自分が卓越した射手だと固く信じている！弓使いの中の弓使いだと！なぜそう思うのか、とあなたは尋ねるだろうか？それは、彼に「称号」があるからだ！もし、10代の若造が彼の目の前で弓を射て、しかも的を射抜いたとしても、「百発百中の射手」という称号を持つ彼は、決してその若造を称賛したりはしない！それどころか、彼はその事実憤慨するだろう！まるでその若造が自分に向かって矢を放ったかのように、深く傷つくのだ！その矢が、5歩離れた動かない的ではなく、まさに自分の心臓を射抜いたかのように感じるだろう！自分には弓を引き絞ることさえできないという事実は、何の意味も持たない。彼は、その若造が自分の称号を軽んじたことで侮辱したのだと、拳を振り上げて襲いかかろうとするだろう！まるで弓を引く権利があるのは自分だけであるかのように。まあ、彼の目には、他の人々も射撃をしても構わないが、決して的を射抜いてはならない、ということになる。ネオリットで、「百発百中の射手」という称号を持つ人物がいると知ったら、その者に弓を渡さないのが賢明だ。そして、彼が弓を手に行っているのを見かけたら、別の、もっと面白い場所

へ離れるのが賢明だ。なぜか、と問うだろうか？ その理由は極めて単純だ。「百発百中の射手」という称号を持つ新石器時代の人間は、何を狙おうと、何かには当たってしまうかもしれないからだ！ もし、まったくの偶然で、例えばあなたを射抜いてしまったとしても、彼は「まさにあなたを狙っていたのだ！」と主張するでしょう！ あなたが悪意を持って彼の方へ走り寄り、罵詈雑言を吐きながら迫ってきたが、彼はその称号と、その称号が保証する並外れた射撃の腕前のおかげで、あなたの企みを阻止したのだと。

これは皆さんには少し理解しにくいかもしれませんが。なぜなら、新石器時代の人間の繊細な心理についてある程度の知識が必要だからです。もっと分かりやすい例で説明しましょう。そちらの方が、皆さんにはより響くと思います。教えてほしい、君たちは一日に何度も、一番よく何を考えている？ 言うまでもなく、女性のことだ。君たちのほとんどは、自分を大切にしてくれる女性がいるはずだ。そして、人前で彼女と好きなように振る舞うことに慣れきっている。誰かに二人を見られているかどうかなんて、全く気にしていない。ネオリタでは、全く事情が異なる。君たちが延々と考えていることは、もちろん許される。だが、それは特別な「称号」を持つ女性とだけだ！ 今までのように「俺の女」などとは言わず、その称号を使うことになる。同じ行為でも、その女性がその称号を持っているか否かによって、善か悪かが決まるのだ。それはまるで「不敗の弓使い」という称号のようなものだ。もし誰かがその称号を持っていないなら、その人の前で弓を射るべきではない。そうでなければ、彼は死ぬほど気分を害するだろう。さて、ある女性が考え直し、自分が選んだ相手はやはり何にも向いていないと結論付けたと想像してみしてほしい。こういうことは時々あるって、よくご存知でしょう。もし彼女があなたたちの誰かのところに来て、「やっぱり彼の方がいい」と言ったら、どうしますか？ 基本的には、問題ないと思うでしょう。ただ、失った相手に何か贈って、その損失を埋め合わせればよいだけだ。そう思うでしょう？ 私の言う通りですよ？ ネオリタでは、そんなことは誰の頭にも浮かばないはず！ 彼女があなたたちの誰かのところへ行くこと自体、ネオリタでは完全に禁じられているのです。なぜなら、彼女には「称号」があり、それは彼女が彼の女性であり、あなたたちの女性ではないことを意味しているからです！ そのような称号は無効にすることは可能だが、あなたたちにも、彼女にも、そして彼女の元夫でさえも、それを行うことはできない。それを行えるのは最高位のシャーマンだけであり、それには莫大な量の肉を代償として支払う必要があり、それによって生涯の財産を失う者も少なくないだろう。あなたたちには、生涯の財産を失うことなど大したことではないと思われるかもしれない。何しろ、家族全員で持ち運べる以上のものは誰も持っておらず、時折場所を移しているのだから。しかし、新石器時代の人々にとって、「生涯の財産」を失うことは、自分に起こりうる最悪の事態なのだ！ 称号については——それらは非常に重要であり、途方もなく高価であり、新石器時代の人々は皆、自分の称号こそが自分の価値を示す唯一かつ決定的な証であると固く信じている。

では、例に戻ろう。すでに「誰かの妻」という称号を持っているにもかかわらず、あなた方の誰かを選んだあの女性についてだ。第一に、そして最も重要なこととして、決してあちらの男のもとへ行ってはならない！ なぜだ？ 彼は劣っているからだ！ 私はこれを何度も説明してきた。もし彼女があなたたちの誰かのところに来たのなら、彼女が来た相手の方が優れており、あちらの男は劣っているのだ。真の新石器時代の人間は、ライバルのところま

でわざわざ足を運ぶことさえあるだろうが、それは例えば、侮辱的なジェスチャーを見せるためだけである。侮辱的なジェスチャーは、新石器時代の儀式のようなものだ。新石器時代の人間なら誰でも、誰かに侮辱的なジェスチャーを見せることで、そのたびに気分が格段に良くなる。なぜか、と尋ねるだろうか？ なぜなら、そのようなジェスチャーは、それを見せた相手が自分より劣っていることを明白に証明するからだ。つまり、新石器時代の人間の考え方では、それが自分が優れているという証拠になるのだ！ きっと皆さんは、この新石器時代の話、果たして本当に良いアイデアなのかと疑問に思っていることでしょう。だって、例えば家族とどこかへ、例えば森へ出かけたとして、どの木の陰からでも新石器時代の人類が飛び出してきて、侮辱的なジェスチャーを見せられたらどうするのでしょうか？ 皆さんはまだ、新石器時代の本質が一体何にあるのか、完全には理解していません。新石器時代の人々は、とても礼儀正しいことができる。問題は、彼らが誰に対して礼儀正しいかということだ。もちろん、彼らは自分より優れた人々、つまり狩りをする必要がなく、自分たちが狩った肉を直接差し出さなければならない人々に対しては礼儀正しい。彼らに良いマナーと好意を示すために、彼らは命がけで尽くすだろう！ こうした礼儀正しさや好意を示すために、彼らは間違いなく、決して侮辱的ではない特別な身振りを作り出すだろう。彼らはそれをまるで反射的に使うようになる。身振りどころではなく、おそらく特別な言葉も生み出すだろう。それらは、自分より優れた人々の機嫌を良くすること以外に何の役にも立たない言葉だ。マンモスを指す言葉の数など、新石器時代の人々が持つこうした言葉の数には到底及ばない。新石器時代の人間の誰もが、自分より優れた者に背中を叩いてもらうことを夢見ているのだ！ 新石器時代における背中を叩くという儀式は、その意味を少し変えるだろう。もはや「私たちは同じだ」という意味にはならない。とんでもない。優れた者が劣った者の背中を叩けば、その劣った者は、まるで一日中、自分より劣る者全員に侮辱的なジェスチャーを見せびらかすことしかしていなかったかのように、大喜びするだろう。しかし、彼自身はその「優れた者」の背中を叩くことはできない！ そんなことは頭にも浮かばない！ なぜなら、劣った者が行うこの儀式は、叩かれた者にとって極めて侮辱的なものになるからだ！ 今日はいくらにしてもいい。内容は難しいので、少しずつ理解していこう。よく言われるように、新石器時代は一朝一夕に築かれたわけではないのだから！ 例えば、一方が優位で、もう一方が劣位という様々な場面を演じてみてください。新石器時代の人間として、「熊退治の達人」といった称号を持っていると想像してみてください。ただし、やりすぎは禁物です。だからといって、いきなり素手で熊に飛びかかる必要はありません。まずは、自分の経験よりもその称号を信じるようにしてみてください。すべては時が来れば自然と理解できるものです。無理に急ぐ必要はありません。

ウサギ

新石器時代入門の次の章では、皆さんがよくご存知の例を取り上げます。ウサギについて話しましょう！もう、皆さんが納得してうなずいているのが見えます。しかし、新石器時代とウサギに何の関係があるのか、と疑問に思うかもしれません。私が説明しようとしているように、新石器時代は人間のためのものであり、ウサギのためのものではないのですから！つい最近まで、新石器時代の人間のことさえ聞いたことがなかった皆さんに、私が突然「新石器時代のウサギ」について話そうとしているのでしょうか？そんなことはありません。ウサギは、真の新石器時代の人間の思考の繊細な秘密を皆さんに説明するために必要なのです。まず、簡単な質問に答えてくれ。ウサギは君たちの誰かを見かけた時、何をする？もちろん、パニックになって逃げ出すに決まってる！つまり、あなたたちからできるだけ遠くへ、まさに反対方向へと逃げ出すのです！ところで、なぜウサギが逃げ出すのか、考えたことはありますか？そう、ウサギは弓を射ることも、罠を仕掛けることも、足跡を読むことも、火をおこすこともできないかもしれません。しかし、どのウサギにとっても、あなたがたが自分を食べたいと思っていることは明白だ。たとえ今、お腹が空いていなくても、ウサギはこう考える。「遅くとも明日か明後日にはお腹が空くはずだ」。あなたがたはそれを知っている。だから、ウサギも知っているのだ。ウサギはただ美味しいだけでなく、信じられないほど速く、かなり賢い生き物なのだから。もしマンモスを見かけて、ちょうど食料庫がいっぱいなら、たぶん放っておくでしょう。マンモスなんて手がかかるし、仕留めるには多くの狩人の労力が必要で、いつもうまくいくとは限りません。でも、ウサギを放っておくでしょう？だってウサギは小さな生き物です。あなたなら誰でも、一度に3匹くらいは楽々食べ尽くせるでしょう！実のところ、あなたたちの多くはそれ以上も平らげてしまうだろう。ただ、あなたたちは「3」より大きな数を知らないから、理解しやすくするために、私は「3匹のウサギ」と言ったのだ！マンモスもウサギと同じように、食べられたくはない。だが、その類似点はそれだけで終わる。マンモスが怒り出し、運悪くその射程圏内に入ってしまったら、君たちは血の海になるだろう。そのことは君たちもよく知っているはずだ！一方、ウサギには君たちに何一つできることはない！怒ったマンモスは恐ろしい光景だ。もし君たちの誰かが間近でそれを見たことがあれば、焚き火のたびにその話をしているはずだ！そして、その話を繰り返すたびに、そのマンモスはどんどん大きくなっていく！一方、ウサギはマンモスとは違って、君たちに何もできないし、そのこともよく分かっている。そこから何が言えるか？そう、つまりウサギは君たちを怖がらなければならないということだ！

ここで再び、巧妙なバランス感覚、そして新石器時代の人々が一切の労力を費やすことなく推論する、驚くべき知的な軽やかさに立ち返ることになる！新石器時代の人間は皆、このような推論を反射的に行う。それをわざわざ説明する必要など全くないのだ！さて、新石器時代の人間が他の人間を見かけたとき、まず最初に、その相手を恐れるべきかどうかを判断しようとする。「どうして人間が他の人間を恐れることができるのか」と、あなたは問うだろう。人間は狩りの対象ではない。せいぜい最後の手段としてだろう。彼らは身を守ることができるし、味も今ひとつだからだ。では、何を恐れる必要があるのか？実は、新石器時代の人間は、自分が食べられてしまうことではなく、何かを奪われて、見返りもなく去ら

れてしまうことを恐れるのだ! 「そんなことがあり得るのか? 」とあなたは問うでしょう。私の言葉を信じてください。「誰かから何かを奪うなら、その見返りを与えなければならない! 」——そうお考えでしょう。新石器時代では、私が示そうとしたように、全く事情が異なるのです。簡単な質問に答えてください。あなた方は、まさにその行為——「見返りもなく誰かから何かを奪い、立ち去る」ことを意味する、たった一つの言葉を知っていますか? そんな言葉は知らないでしょう! あなた方の貧弱な旧石器時代の語彙には、この行為を表す言葉が一つたりとも存在しないのです! マンモスの話になると、その表現は両手の指の数より多いだろう。だって、年老いた一匹のマンモスと、群れを率いるメスと、子連れマンモスの群れと、群れから追い出された若いオスの集団とでは、呼び方がそれぞれ違うのだから…… まあ、皆さんご存じの通り、私が説明する必要はないでしょう。それなのに、「誰かから何かを奪い、見返りを与えず、そのまま立ち去る」という、これほど単純な行為に対して、一つの呼び名さえ持っていないのです! 「私がこれほど長く話しているのだから、新石器時代の人間はきっとそのような言葉を発明するに違いない」と、皆さんは思っていることでしょう。この特異な行為をたった一つの言葉で表現でき、それについて長く悩むことなどないはずだと! 君たちは新石器時代を過小評価している。私の努力にもかかわらず、君たちは新石器時代の人間の精神が持つ、その独創性や技巧のすべてを想像することができないのだ! 彼らは単にそのような単語を知っているだけではない! 彼らはそのような単語を数多く知っているのだ! 彼らはその行為を表す表現をこれほど多く持っているため、毎日違う表現を使っても、それらが尽きるまでには本当に長い時間がかかるだろう!

では、新石器時代の人間にあなたがたが見られ、何かを奪われて、見返りも何もなく立ち去ってしまうかもしれないと彼が思ったとしましょう。彼の反応はどうなるでしょうか? それは、あなたがた一人ひとりを目にしたウサギの反応とほぼ同じでしょう! 新石器時代の人間は恐怖に震えるでしょう! 恐怖のあまり言葉を失ってしまうでしょう! 彼は一刻も早く身を隠し、逃げ出そうとし、決してあなたたちを焚き火のそばに招くことはないでしょう! さて、ここで想像してみてください。あなたたちの誰かが、ただ手ぶらで立ち去る代わりに、たまたまウサギを2匹抱えているとしましょう。そう、狩りで運が味方し、獲物を抱えてキャンプ地へ戻ってきたのだ。新石器時代の人間の反応は、まったく異なるものになるだろう! まず第一に、そして最も重要なこととして、彼は誰もあなたたちを見ていないか、注意深く辺りを見回すだろう。次に、満面の笑みを浮かべて近づき、心から挨拶をしてくる! 彼は信じられないほど親切で、すぐに自分の小屋へ招待してくれるだろう。その際、何気ないふりをしながら、誰かに見られるかもしれないから、その2匹のウサギを何とか隠しておいてほしいと、さりげなく指摘するはずだ。小屋の中では、彼はあなたたちを丁重にもてなしてくれる。いや、丁重なんて言葉では足りない! あなたがたは、自分たちの最高指導者でさえ、この目立たない男があなたたちに示すような敬意をもって扱ったことは一度もないでしょう。きっと不思議に思うでしょう、なぜこんなにも変わったのかと。なぜある時は身を隠して一言も発せず、またある時は、これまで誰もあなたたちをそんな風に扱ったことがなかったため、その親切さに呆気にとられてしまうほど親切になるのか? さて、ある秘密を明かそう。その理由が分かるか? それは、あなたがたが狩り上げたあの二匹のウサギのおかげなのだ! たった2匹の、つまりもう死んでしまったウサギが、どうしてそんなことがで

きるというのでしょうか？ 死んだウサギは動かないはずですよ？ 動かないなら、自分の力でどこへも跳ねて行くことさえできないはずでは？ ひとまず、それが実際に起こったと仮定しましょう。あなたの2匹のウサギが、不思議な方法で生き返り、それぞれのほうへ跳ねて行ってしまったとします。そうなったらどうなる？ 君たちの呆気にとられた顔を見れば、自分たちでその答えにたどり着く見込みはゼロだとわかるから、私が教えてやろう。その場合、君たちは洞窟に洞窟ライオンの群れが住んでいると確信した時よりも、はるかに速いスピードで、この立派な男の小屋を飛び出すことになるだろう！ まだチャンスはある。主人が見せる侮辱的な身振りを目撃し、一連の興味深くユニークな言葉の数々を耳にするだろう。それらは一つの共通点を持っている。彼の考えでは、それらはすべて極めて侮辱的なものなのだ！ その違いとは、新石器時代の人間は誰一人として、何かを持っている者が持っていない者より優れていると信じているという点にある！ 君たちはウサギを持っていたのだから、その瞬間は優れていたのだ！ もし魔法のようにウサギが生き返って跳ね去ってしまったら、君たちは一瞬にして彼の目から見てすべての価値を失うことになる！ 彼が飢え死にしそうだったからでも、何年もウサギを見ていなかったからでも、あるいはウサギのロースト肉に特別な嗜好があったからでもありません！ 決してそんなことはありません！ もし彼があなたの持っていた2匹のウサギを見たら、たとえ1ヶ月間ウサギの肉しか食べていなくても、あなたを自分の小屋に招き入れたことでしょう！ たとえもうウサギを見るのも耐えられず、ましてや食べるなんて考えられないとしても、彼はそうしただろう！ きっと、新石器時代の人間は何か変だと思っているだろう。食べないのに、なぜウサギが必要なのか？ それとも燻製にして保存したり、誰かと分け合ったりしたいのか？ そんなことではない。これを説明するには、段階を追って説明するのが一番分かりやすいだろう。ウサギたちが結局生き返らず、逃げ出さなかったと想像してみてください。あなたは小屋でその家の主人と座っていて、彼はまるであなたが今まさに彼に何かの称号を与えたかのようにあなたを扱います。これはあまり良い例ではないかもしれませんが——別の例を挙げましょう。例えば、あなたが狩りの最中に彼の命を救い、負傷した彼を腕に抱えてキャンプまで運び、さらに美味しいご馳走まで差し入れたかのように、彼があなたを扱っているとしましょう！ そうなれば、ウサギの一匹を彼に贈ろうという考えが、あなたの頭に浮かぶのも無理はありません。君たちのことはよく知っているから、それが全く普通のことだと感じているのも分かる。そんな時、新石器時代の人間はどのように振る舞うだろうか？ 彼にはある問題が生じる。実を言えば、いくつかの問題が生じるのだ。第一に、そして最も重要なこととして、彼はそのウサギを急いでどこかに隠そうとするだろう。しかし、あまり遠くへは離れられないでしょう。なぜなら、あなたがたが彼に属するものを何も見返りもなく持ち去り、その後すぐにどこかへ行ってしまわないかと恐れるからです。どうやってそんなことを思いつくのでしょうか？ 新石器時代の人間は、これほど複雑な推論を完全に反射的に行うことができるのです！ さらに、あなたが贈ったそのウサギのことを誰にも話すべきではないと、彼はあなたに暗に伝えるだろう。なぜなら、彼は単にウサギが欲しいだけではないからだ！ 彼は、万が一に備えて、近所の誰にも、自分がウサギをもらったことを知られたくないのだ！ 必要とあれば、自らそのウサギを見せびらかすことさえあるだろうが、おそらく、それが君たちからの贈り物だったとは決して言わないだろう！ 彼は、自分で狩ったのだと彼らに言うでしょう！ もちろん素手で、その

ウサギが惨敗した死闘の末に！ 打ちのめされて地面に横たわるウサギは、命乞いをしましたが、無駄でした！ しかし、ウサギは死を受け入れ、新石器時代の偉大な人間、すなわちあらゆる美德の新石器時代の理想そのものである、あなたのホストに食われることを誇りにさえ感じたのです！ 実際、新石器時代の人間にとって、そのウサギがどこから手に入ったかはそれほど重要ではありません。単にどこかで拾っただけかもしれないのです。重要なのは、彼がウサギを手に行っているということだ！ そしてさらに重要なのは、他の人にはないということだ！ もし誰かがたまたまウサギを手に入れたとしても、そのウサギは、あなたのホストのウサギと比べれば、単なる無に等しい！ もし誰かにこの話をすれば、君たちからもらったそのウサギは、もはやただのウサギなどではない！ それは「ウサギの中のウサギ」、この平らな世界の最高のウサギとなるのだ！ それは「偉大なるウサギのシャーマン」であり、生涯を通じて他のウサギたちに侮蔑的な仕草を見せることしかしてこなかった存在なのだ！ ウサギなんてどうでもいい！ クマたちは、ウサギが木に登れないという事実を巧みに利用し、リスのように木の上へ逃げ上がっていたのだ！ このウサギには、近所のすべてのサーベルタイガーが、狩り上げた獲物を何でもかんでも持ち寄っていた！ そして彼は、彼らの献上を動じることなく受け取り、たまに一匹か二匹の剣歯虎の背中をポンポンと叩くだけだった！ 頭の中でそんな物語を紡ぎながら、このホストはあなたたちを常に監視し、その間ずっと一つのことについて深く考えているだろう。彼が何を考えているか、絶対に当てられないだろう！ でも心配はいらない、私がすべて説明してあげる。彼が考えているのは……もう一匹のウサギのことだ！ 新石器時代の人にとって、この状況は明白だ。君たちが彼に何かを与えたのに、彼は君たちに何も与えなかった。つまり、君たちは彼より劣っているということだ。あなたがたが彼より劣っているのなら、あなたがたは彼に自分のウサギをあげたわけじゃない！ 実際、彼はそれを自分のウサギだと思い込むだろう。当然、彼に与えられるべきものだったと！ そのウサギがどういうわけか、特に深く追求する必要もないような曖昧な方法で、あなたがたの手に渡ったに過ぎないが、本来の運命はあなたがたの主人の胃袋に入ることであつたのだ！ きつこう言うだろう。「お前たちが狩ったウサギが、どうして彼のウサギになるんだ？ もし彼が、例えばアナグマを狩ったなら、それは彼のアナグマであつて、お前たちのものじゃないだろう！」と。お前たちはまだ、新石器時代の思考の洗練さを完全には理解していないのだ。新石器時代の人間はこう考えるだろう。「お前たちはウサギを二匹持っていたのに、彼に一匹しか渡さなかった。それなら、もう一匹のウサギが一体何のためにあるんだ？ なぜ二匹渡さなかった？ もしかして、彼を侮辱し、屈辱を与え、何らかの形で自分と同等に扱おうとしたのではないか？ つまり『お前にはウサギ、俺にもウサギ』、つまり『俺たちはウサギたちと同じように、どちらも同じくらい優れている』と言わんばかりに？」あなたの贈り物は、隠された侮辱ではなかったのか？ だって、あなたは彼にウサギを2匹贈ることができたし、むしろそうすべきだったはずだ！ そうするのが最も妥当だった。そうすれば、彼はより多くを手に入れ、ウサギを2匹多く持つことになり、あなたたちは無に溶け込んでいたはずだ。しかし、それでもなお、ある侮蔑的な仕草を目撃し、興味深いが同様に侮蔑的な言葉の数々を耳にする機会を逃すほどではなかった。

ガチェック=リシツァ

皆さん、特に若い頃には、女の子を見ただけで頭が真っ白になってしまった経験があるかもしれません。そう、ただただ頭が真っ白になるのです。例えば、数歩先にある動かない的を弓で射抜くこともできず、魚も全く釣れず、まるで最期の犠牲者であるかのように振る舞ってしまうのです。普段は石を投げてリスも当てられるのに。大抵、そんな時は何を食べても美味しくなく、どこを見てもその女の子しか目に入らないのです。狩りに少しは集中すべき時でさえ、彼は彼女を見ている。そして、彼女のことを考えるだけで頭がおかしくなるほどだが、よく見てみれば、彼女に特別なところなど何もない。彼女は料理が特に上手いわけでもなく、キノコに詳しいわけでもなく、動物の皮をきれいに剥ぐこともできず、とにかくまだまだ学ぶべきことが山ほどある。キノコの中には毒があることはよく知っているはずなのに、もしあの娘が調理したものと知れば、彼は迷わずどんなに毒の強いキノコでもいくらかでも平らげてしまうだろう。これは、部族のシャーマンのどんな呪文も役に立たない状況だ。もし彼がその悩みを部族のシャーマンに相談しに行ったとしても、普段は穏やかなそのシャーマンでさえ、彼を小屋にゆっくり座らせることさえしないだろう。シャーマンはただ「彼女をさらってこい、俺の邪魔をするな」と言い放ち、そしてシャーマンらしく

「次!」と叫ぶだけだろう。信じられないかもしれないが、このような状況こそが新石器時代の人々の物語の主なテーマとなるのだ! あなた方の誰もが人生の半分を狩りに費やしているのだから、焚き火の周りでは主に、どうやって獲物を仕留めたかについて語ることになる。ご存知の通り、新石器時代の人々の大半は、狩りをする術を知らないだろう。中には何もできない者もいて、ただ「自分たちは優れている」というだけで生きていくでしょう。だから彼らは狩りの話より、私たちの社会で女性が最もよく話すような話題を語り合うことになるのです。あなたのキャンプには、若い頃の誰かが自分の姿を見ただけで夢中になっていたことを、他の女性たちに思い出させるのが好きな女性が一人もいないはずがありません。特に、かつて誘拐された経験のある女性がこの話を好んで語り、その話の大部分は、誘拐される前にいかに必死に抵抗したかという描写で占められている。しかし、結局彼女は誘拐犯の命を助けた。なぜなら、そうしなければ、彼はどうやって彼女を誘拐できたというのか。こうして彼は彼女を誘拐し、その後二人は長く幸せに暮らしたのだ。新石器時代の人々の物語において、誘拐はデリケートな問題だ。何しろ新石器時代では、すでに説明した通り、何よりもまず女性の父親と折り合いをつけなければならないのであって、女性本人とはではない。だから、彼女を誘拐するなんてことは、あまりあり得ないのだ。私たちの社会では、もし若い男が娘と知り合い、彼女を見た瞬間に、この章の冒頭で述べたあの衝動に駆られたなら——彼は迷わず彼女をさらうだろう! もし彼が少し考え、例えば「今日は狩りがあるから、明日さらうよ」と彼女に告げたとしたら、その時の彼女の印象が、その後の展開を大きく左右することになる。「最後まで抵抗するから、誘拐なんてするな」と言う娘も少なくないだろう。だが、不思議なことに、翌日には花を摘みたいという抑えきれない衝動に駆られ、約束の場所にきっちり現れるのだ。そういうことがあるのは、皆さんご存じでしょう。さて、新石器時代では、こうした物語がすべて非常に人気を博すことになるでしょう。そこで、私は今日、皆さんのために、そんな新石器時代の物語を一つ用意しました。まずはその

主人公を紹介し、その後、この新石器時代の人々の物語が、皆さんの女性たちの物語とどう異なるのかについて解説したいと思います。

この物語の主人公には、新石器時代の名前が必要だ。そこで、この教科書のために、そんな名前を思いついた！何よりもまず、その名前が食べ物と連想されないようにしなければならない。そうすれば、物語そのものに集中できるからだ。「ガツェク」が何か、よく知っているだろう？洞窟を飛び回り、たくさんいて、あちこちに糞を撒き散らし、食べられないものだ。さて、これで「ガチェク」は決まりました。では、「リシツァ」が何かご存知ですか？ご存じの通り、キツネのことです。ただ、メスのことで、これもまた食べられないものですが、冬にはきれいな毛皮を持っています。というわけで、私たちの新石器時代の主人公は「ガチェク・リシツァ」という名前にしましょう。この物語はそれほど長くはありません。我々がガツェク＝リシツァは、ある少女を見ただけで頭が真っ白になり、彼女をさらう代わりに、その父親と折り合いをつける。もちろん、彼女には一言も話しかけない！ガチェク・リスィツァは新石器時代の人間であり、私の物語のすべての主人公も同様であることを思い出してほしい。少女の父親は、前章で私が説明したような理由から、ガチェク・リスィツァの背中をポンポンと叩くだろう。そのため、ガチェク・リスィツァは、すでに小屋に恋人を連れてきたと確信するだろう。誰かが狩った二匹のウサギが、その後生き返って自分の道へと跳ね去っていったという私の例を覚えているだろうか？ガチェク＝リシカの物語でも似たようなことが起こる。少女の父親が考えを変え、ガチェクが予想もしない行動に出るからだ！これは、正直なところ、ウサギの王から逃れるために木に登るクマたちのようなものです。しかし、ガチェクは予想していなかったとしましょう。本来なら予想すべきだったのですが。さて、父親は何をしたと思いますか？父親はガチェク・キツネに侮辱的なジェスチャーを見せたのです！つまり、最初は優勢だったガチェクが、突然劣勢に立たされたということです！そこで、キツネのガチェクはどうしたか？弓を手に取り、ほとんど狙うこともなく、たった一本の矢で娘の父親を射殺したのだ！その後、当然ながらシャーマンか何かになるだろうが、それはさほど重要ではない。新石器時代の間は、こんな物語を信じないと思うか？彼らは何の躊躇もなく信じるだろう！なぜ信じないというのか？さらに言えば、新石器時代の人々の子供たちは、役に立つことに取り組む代わりに、この物語を暗記するだろう！どの焚き火の周りでも、その断片を朗読するだろう。例えば、少女の父親が「焚き火のそばでロース肉を焼いて、『ガチェク・リシツァほど親しい友はいない！』と叫んでいた」といった具合に。もちろん、それは彼が考えを変えて、ガチェクにあの侮辱的な仕草を見せる前の話だ。その子供たちの親たちは、この朗読のせいで、偉そうな連中から背中を叩かれて褒められることになるだろう！ガチェク＝リシカという一人が、少女の父親や少女、そして何より自分自身を怒らせるために、たった一発の矢を放ったという、これほど素晴らしい英雄だったことを、皆はとてつもない誇りを感じるに違いない！彼らの目には、まるでガチェクが拳でマンモスを倒し、そのマンモスを——一匹丸ごと——自分の手でキャンプまで運んできたかのような、とてつもない偉業に映るだろう！

この物語全体に、一つだけ微妙な点がある。なぜガチェクは、その娘を自分の女にするために、実際に彼女をさらわなかったのか？だって、君たちなら誰でもそうするだろう？私自身、新石器時代の人々が皆これを信じるようにするには、どう解決すべきか確信が持て

ない。何か考え出すさ。だって、例えばガチェックが彼女を連れ去る約束の場所に現れたとして、彼女が、もちろんまったくの偶然で、そこで花を摘んでいたとしたら、その状況はうまく収まらないだろう。だって、ガチェック・キツネが、彼女を誘拐するのは彼女に害が及ぶかもしれないからやめておく、なんて、そう簡単に女の子に言えるわけがないだろう！ 彼が言い終わる前に、ウサギのように、いやそれ以上に速く逃げ出さなきゃならなくなる。だって、多くの女の子は弓の腕がかなりいいんだから、君たちもよく知ってる通りさ。「誘拐したくてもできない」という理屈を彼女に説明し終える頃には、彼自身、ハリネズミのようになってしまっているかもしれない！ それに、矢には大抵、逆棘がついているから、抜くのは難しい。彼を疲れさせないために、とどめを刺した方が簡単だろう。私の新石器時代の物語が、細部まで練り上げられているとは言わない。だが、特に新石器時代の人間の視点から見れば、そこにはある種の可能性が秘められている。

首長

皆、自分たちの首長が誰なのか知っているだろう。彼は部族の中で最も重要な人物だと言える。では、それは彼が皆より優れているということだろうか？ ここで言う「優れている」とは、新石器時代の人々が理解するような意味での話だ。答えはノーだ。新石器時代の人々は、誰かが自分より優れていることをどうやって見分けるのか？ それはとても簡単だ！ 「持っているものがもっと多い」ということだ！ しかし、君たちの首長は、君たち一人ひとりとほぼ同じくらいしか持っていない。あの特別な首飾りがなく、皆が彼の言うことを聞いているという事実がなければ、彼が何か特別だなどとは誰も思わないだろう。もし誰かが彼に「君は優れている」と言ったとしても、彼はそれがどういう意味なのか、あまり理解できないだろう。あいつは年寄りのじじいだし、俺が君たちに新石器時代の秘密を教えているせいで、俺のことを少し嫌っている。俺が君たちを狩りから遠ざけているから、それは全く無意味なことだと彼は思っているに違いない。彼はそれを口には出さないだろう。新石器時代というものが、もしかしたら本当にあるかもしれないと恐れているからだ。部族全員の前で馬鹿にされるのが怖いんだ！ まあ、それは彼の考えだ。さあ、教えてくれ、なぜお前たちは彼の言うことを聞くんだ？ また呆気にとられて、互いに顔を見合わせているな。そんな質問が頭に浮かんだことなんて一度もないからな！ まあ、そういうものだ。時には首長の言うことを聞き、時には女の言うことを聞く。そして時には、自分で考えなければならないこともある。それに、お前たちは言うだろう、彼はたくさんのことを知っているし、自分ではできなくても、誰が一番それを上手くやるか覚えている、と。どの動物を追跡させるべきか、誰に焚き火をさせ、誰に魚を捕らせればいいのかを知っている。誰が待ち伏せを最も上手く仕掛けるか、そして弓や槍を持ってどこへ何人を送り込むべきかを知っている。彼は頭の中で狩りの全体計画を練り上げ、動物の習性を熟知し、自分がまだ子犬で、自分が酋長になるとは全く考えてもいなかった頃の出来事も覚えている。あなたたちの酋長は最も重要であり、皆が彼の言うことを聞く。なぜなら、彼は自分のやっていることに精通しているからだ。部族全体で、彼のような者はあと2、3人しかおらず、彼らは皆、親友同士だ。リーダーは、彼らも自分と同じ能力を持っていることを全く気にしていません。むしろ、彼らと焚き火を囲んで、昔話に花を咲かせたいと願っているほどです。たとえ一人で狩りに行かない時でも、全員が無事に帰還したかを確認するために、刻み目を入れた棒のような高度な手段を使います。もし君たちの誰かに何か悪いことが起きたら、彼はそれを深く心に刻み、自分が何かを台無しにしたか、あるいは何かを見落としたのではないかと考えるだろう。彼の女は時々、彼に何かを持って行って、せめて何かを食べさせてほしいと君たちに頼むことがある。彼は熊のように不機嫌に座り込み、すべてが自分のせいだと考えているからだ。つまり、彼自身は私をあまり好いていないが、彼はなかなかまともな男だと言わざるを得ない。もちろん、あなたたちの、つまり旧石器時代的な意味での話だが、もし彼に何かあったら、あなたたちの誰かが彼の代わりにならなければならないことは、あなたたちも分かっているはずだ。その新しいリーダーは、あらゆることを考え、とにかく新しいことを素早く学ばなければならない。君たちは皆、その新しいリーダーの言うことを聞き始めるだろう。前のリーダーは長年かけて何とかやりくりしてきたが、新しいリーダーは新参者だから、前のリー

ダーよりも彼を助けることになるだろう。それに、新しいリーダーがうまくやっていけないのではないかと、死ぬほど怖がるだろう。

これまで何度もお伝えしてきた通り、ネオリタではすべてが全く異なるものになります。以前にもお話ししましたが、そこには大量の食べ物、大勢の人々、そして巨大なキャンプ地があることを覚えているでしょう。そんなキャンプ地の先頭に立つ首長なら、何でもかんでも熟知しているに違いない、と皆さんは思っていることでしょう！あの巨大なキャンプにいる一人ひとりの名前を覚え、今のリーダーがあなたたちを気遣う以上に、一人ひとりを大切に思うに違いないと。彼は全く眠らず、松の木ほどの長さの刻み目のある棒を使い、あなたたちの安全を心配して震えているに違いないと。きっと、彼が一人で皆のために狩りをし、一本の矢でマンモスを仕留めることなど朝飯前だ、と想像しているだろう！残念ながら、君たちをがっかりさせなければならない。実は、新石器時代の部族の首長は、何一つとして熟知していないのだ！動物の足跡を読むのに苦労したり、魚を釣ったり弓を射ったりできないという意味ではありません。おそらく彼は自分の名前さえ覚えておらず、自分の「称号」を数えるのには特別な助手たちを雇い、その見返りに彼らの背中をポンポンと叩いて褒めることでしょう！彼らは皆、贅沢に浸り、一日に何度も最高級の肉を食らうだろう！その上、彼は自分こそがあなたたち全員の中で最高だと自負し、皆が狩りから無事に帰還したか確認するために、溝の入った棒のような高度な技術を使うために脳みそを酷使することなど、微塵も考えないだろう！もし君たちに何か悪いことが起きたとしても、例えばサーベルタイガーに食われてしまったとしても、彼の機嫌を損ねることは微塵もない！彼はただ、他の狩人たちを派遣するだけだ！その際、君たちの首長には到底思いつかないような、最も奇妙な命令を下すかもしれない！例えば、狩猟に武器を一切持たせることなく、自分の歯でサーベルタイガーを噛み殺すよう命じるかもしれない！自分の首長に頼むように、彼にやり方を教えてくれるよう頼めると思うか？そんなことはあり得ない。ネオリタでは、首長の前で一言も口を開くことは許されない！彼の命令は、どんなものであれ、少しの反抗もなく従わなければならない！きっと、これは最高の仕事だと思い、自分たちなら誰でもそんな首長になれると思っているだろう？だって、何もできなくてもいいし、腹いっぱい食べて、最も馬鹿げた命令を出せばいいだけだ。これ以上何を望むというのか？問題は、あなたたちの誰一人として、彼の座に就くことができないということだ！「なぜできないんだ？」と君たちは問うだろう。だって、君たちの首長の座は誰にでも回ってくるはずだし、ただ誰もそこまで考えたり計画したりする気がないから、それは誰にとっても最後の手段なだけじゃないか？そう、君たちが考えている通り、新石器時代の首長の座に就くことには、最も厳しい禁止事項が課されるのだ！もし新石器時代の首長が、誰かが自分の地位やすべての称号を狙っているのではないかと疑い始め、この広大なキャンプの中に、そんなことを考える人間がたった一人でもいると察知したなら、彼の最初の命令は、その者を捕まえて連れてくることだろう！決して、その挑戦者と話し合ったり、親しくなったり、自分の囲炉裏に招いたりするためではない。その後の命令がどのようなものであれ、すべてに一つの共通点がある。それは、その挑戦者に、そもそもそんな考えを抱いたことを激しく後悔させることだ！首長は、その企ての欠点がキャンプの全員の目に留まるような命令を下すのだ！巨大な新石器時

代のキャンプの全員が、すぐにこう結論付けるだろう——新石器時代の首長の座を狙うくらいなら、飢え死にするか、自分で古びた剣歯虎を噛み殺そうとする方がまだましだと。

「まあ、そうかもしれない」とあなたは思うだろう。しかし、これらすべてから、そのような新石器時代の首長は少し馬鹿に見えるのではないか？何もできず、誰のことも気にかけず、誰かが自分の地位を奪うことを最も恐れているような首長とは、一体何者なのか？このことを一度きっぱりと心に刻んでおいてほしい。新石器時代において、そのような首長は、キャンプ全体にいる他の誰よりも優れているのだ！たとえそこに、君たちがこれまでに見た中で最大の蟻塚にいる蟻よりも多くの人に住んでいたとしてもだ！彼は単に、この平らな世界全体で最高なのだ！新石器時代には、優れた者は決して、絶対に馬鹿には見えないという特徴があるのだ！誰も彼を笑ったり、からかったりしない！これは君たちには理解しがたいかもしれない。なぜなら、君たちの多くは、誰にでも冗談を言うという旧石器時代の習慣に囚われており、その際、君たちの首長を容赦なく、しかも彼の面前でからかうからだ！実際、君たちは自分自身を冗談のネタにすることさえよくあるだろう！新石器時代の首長は、決してそんなことはしない！もし彼が自分自身を冗談のネタにし、例えば「弓の腕前が下手だ」などと認めてしまったら、誰かが「彼の言う通りだ」と思い込んでしまうかもしれないからだ！なぜ？なぜなら、彼が何を言おうと、彼は常に正しいからだ！そこから、誰かが彼より弓の腕が上であり、実際には彼の地位を奪うことさえできると想像するまで、あと一歩だ。私の説明のおかげで、私たちがどれほど高度な現象を扱っているのかが、皆さんにも徐々に明らかになってきていると思う。新石器時代を理解することは、誰にとっても容易なことではない！

肉の徴収者たち

きっと皆さんの多くは、とっくの昔に「この新石器時代の人たち、何かおかしい」と思ったことでしょう。自分たちがどんなに肉を運んでも、あの人たちはそれを隠し持ったまま、たとえ飢え死にしそうになっても、匂いさえ嗅がせてくれないだろうと。だって、それはタブーだ！肉を自分たちだけで隠し、分け与えないなんて、あり得ない。同様に、人間、特に自分の部族の人間を撃ち殺すこともタブーだ。もし誰かがそんなことをしたら、お前たちはその者を顔面を殴りつけてキャンプから追い出し、自力で生き延びさせるだろう。もう二度と彼を信用するつもりはないからだ。キャンプから追い出されたそんな人間は、どれくらい生き延びられるだろうか？それは状況次第だ。例えば熊に襲われたら、それはごく短期間だろう！そんな状況なら、君たちの誰もが熊よりサーベルタイガーに遭遇した方がましだと思はずだ。なぜなら、サーベルタイガーは常にまず獲物を殺すからだ。君たちもよく知っている通り、熊はすぐにそれを食べ始める。同様に、相手の同意なしに、ましてや何か贈り物で返礼することさえせずに、相手の所有物を奪うこともタブーだ。これらすべては禁じられている！もしそんな考えが頭に浮かんだとしても、皆さんはしばらくの間、食べ物を自分用に隠したり、誰かを撃ち殺したり、相手の許可なく何かを奪ったりすることが、果たしてそれだけの価値があるのかどうかを熟考するだろう。そして、新石器時代には「優れた人々」がそうするのだから、自分たちもやっていいのだと考える者も少なくない。真の新石器時代が到来すれば、狩った動物の肉を自分たちのために隠し、決して「上流階級」に持って行って背中を叩いてもらおうなどとはせず、さらには、他人が自分で狩ったものを、許可も求めず、何の見返りも与えずに奪い取るようになるだろうと！あなた方の多くは、新石器時代になれば、自分の部族の人間を殺したり、ありとあらゆるタブーを破ったりできるようになるだろうと考えている。だって、新石器時代の首長やその側近たちは、まばたき一つせずにそうするだろうから。それなら、なぜあなたたちはできないというのか？

いや、それは間違いです！この議論全体に、ある誤りが潜んでいる。その誤りは、あなた方一人ひとりが新石器時代の首長と同じであるという、あなた方の深い確信に起因している。なぜそう考えるのか、私にはわかる。それはあなた方のせいではない。それは旧石器時代のせいだ。あなた方はそこにあまりにも長い時間を費やしたため、それがあなた方の心に深い刻印を残してしまったのだ。自分たちにとってタブーである肉を隠しておくという行為が、新石器時代のたった一つの言葉で表現されるなんてことはない。新石器時代の人間は、そのような行為に対して少なくとも2つの全く異なる言葉を考え出すでしょう！なぜ2つも必要なのか？それは、もしあなたがたが自らの手で狩った動物の肉を自分用に隠し、新石器時代の首長に一切持っていかず、その見返りに首長の部下に背中を叩いてもらうようなことがあれば、それには少なくとも1つの言葉が必要になるからです！これはもちろんタブーの破りであり、新石器時代の集落の規則に対する重大な違反だ。難しいことではないと思うかもしれない。せいぜい見つかって、顔面を殴られて集落から追い出されるだけだろう。そうして去り、例えば飢えた熊が見つかる前に、別の新石器時代の集落を見つけられるかもしれない。しかし、新石器時代の人間は、これに対して少なくとも2つの言葉を考え出すと、私は言った。その2つ目の言葉は、まったく同じ行為、つまり自分用に肉を隠すことに

対して、より優れた人々を指して使われることになる！そして、それは全くタブーではない！彼らがそうする時、それは誰にとっても当然のことになるのだ！新石器時代の人間は、それが同じ行為であることに全く気づかないだろう。ただ、それに対して二つの異なる言葉を使い、誰がそれを行うかによって、一方はタブーであり、もう一方はそうでないだけなのだ。これは、自分用に肉を隠しておくことだけに限った話ではない。同じ部族の人間を殺すことについても、二つの異なる言葉が存在する。そして、ご想像の通り、もしあなたが誰かを殺せば、それはタブーとなるが、もし新石器時代の首長が誰かを殺せば、それは全く正当で公正なことと見なされる。そのせいで彼がキャンプから追い出されることなど決してない！そんなことは彼らの頭には微塵も浮かばないのだ！彼らは、殺された相手にはそれ相応の報いがあったと言うでしょう！肉を自分用に隠していたか、あるいは他のタブーを犯したから、自業自得だと。たとえ彼が自分のためにほんの少しの肉を隠しただけだとしても、優れた者たちは、彼が考えられる限りの新石器時代のタブーをすべて破ったのだと言うだろう！彼の意図は、新石器時代の首長を噛み殺し、その地位を奪い、彼ら全員を狩りに駆り立てることだったのだ。もっとも、彼らはそうする必要などないのだが。なぜなら、彼らがより優れており、相応の称号を冠していることは明らかだからだ。同様に、本人の同意なしに、そしてもちろん何の代償もなしに、誰かの所有物を奪うことについても——新石器時代の人間は、この行為に対して少なくとも二つの言葉を用意しているだろう。もしあなたの方の誰かがそんなことをしたら、ご想像の通り、それはタブーとなるだろう。しかし、それはまるで、新石器時代の首長本人に対して侮辱的なジェスチャーを見せる計画を立て、その前に彼の側近全員に対しても同じ侮辱的なジェスチャーを見せるようなものだ！そしてその後、新石器時代の首長を筆頭に、彼ら全員を噛み殺して、その地位を奪おうとするようなものだ！『ネオリタ』には、首長の特別な側近たちがいて、彼らの唯一の仕事は、まさにそのようなことがあなたの意図だったと証明することになる！彼らはあなたの意図について、あまりにも賢く、そして長く語り続けるので、あなた自身もそれを信じてしまうだろう！君たちは、新石器時代の首長を本当に噛み殺そうとしていたのだと思い込むだろう。とはいえ、それは人間を殺すにはあまり現実的ではない方法だし、単に石で頭を殴り殺すほうがずっと簡単だったはずだ。これらすべては、新石器時代の最も重要なタブー、すなわち相手の同意も補償もなく、相手の所有物を奪うことを禁じるタブーを破った結果に他ならない！さて、もしこの行為を新石器時代の首長が行ったとしたらどうなるか、考えてみてください。皆さんの表情を見ると、もう何かが分かかってきたようですね！そうです！新石器時代の首長は、キャンプにいる誰からでも、その人の所有物を、許可を求めず、ましてやそのことを称えて背中を叩くことさえせずに、自由に持ち去ることができるのです！そして、この行為を表すのに使われる言葉は、まったく別のものになる！その言葉は、最初の言葉とは何の関係もなく、タブーを破ることにもならない！新石器時代の人間は、この二つの言葉が同じ行為を指していることなど、全く気づくことさえできないだろう！なぜ同じ行為が二つの異なる言葉で呼ばれ、そのうちの片方はタブーで、もう片方はそうではないのか？それは、新石器時代の首長の方が優れているからであり、だからこそ彼にはそれが許されるのだ。しかし、あなた方一人ひとりが同じ行為を行えば、それは「全平坦世界」に君臨する秩序に対する恐るべき冒瀆となるだろう！新石器時代の集落には、最大の蟻の巣にいる蟻と同じくらいの人々が

住んでいるのだから、新石器時代の首長が皆から狩った獲物をすべて取り上げるのには少し時間がかかるだろう、と君たちは考えているかもしれない。それに、たとえ熊のように強かったとしても、自分の小屋まで運んで隠しておくには、それほど多くの肉を持ち運ぶことはできないだろう。何しろ、多くの場合、獲物はその場で少しずつ解体しなければならないのだから、特に大人のマンモスとなればなおさらだ。仮に新石器時代の首長が、弓から放たれた矢のように速く、熊3匹分の力を持っていたとしても、その肉をすべて収容できるような小屋をどこから手に入れるというのか？ そろそろ少しは理解し始めたようだ。そして新石器時代には、早急な解決を迫られるいくつかの問題が生じるだろう。問題は、皆さんがまだ旧石器時代の古い考え方で物事を捉えている点にある。新石器時代の首長は指一本動かさず、自分では何もしない。そもそも、前章で説明した通り、彼は何もできないのだから、自分の手で何かを作るなんて到底無理だ。彼自身、もし自分で小屋作りに取り掛かれれば、失敗して何かの頭に落ちてくるかもしれないということを、よく理解しているはずだ。彼はそれをよく知っているが、間違いなく自ら「偉大なる小屋建築家」という称号を名乗るだろう。では、彼はどうするだろうか？ 特別な助手たちが、彼のために巨大な小屋を建ててくれるのだ！ 他の助手たちは、昼夜を問わずその小屋を見張るだろう。だって、キャンプ全体の新石器時代の人々は皆、そこに肉があることをよく知っているのだから！ 皆さんには奇妙に思えるかもしれない。だって、自分のキャンプで肉がどこにあるか、皆さんはよく知っているだろうし、肉はよく人目につく場所で干されていて、誰も見張っていないのだから。しかし新石器時代では、ある理由から、誰もがすべてを見張ることになるのだ！ 新石器時代の首長もまた、狩りから戻ってくる狩猟者たちから肉を集める仕事を、特別な助手たち、すなわち「肉徴収人」に任せるだろう。これらの肉徴収人たちは、自分たちの仕事のある特別な言葉で表現する。それは、集落中の人々から彼らの同意なしに好きなだけ奪い、見返りも与えないにもかかわらず、それによっていかなるタブーも破っていない、ということの意味するのだ！ 彼らはこの仕事に最大限の情熱を注ぐだろう。何しろ、その肉の一部を自分たちのために残すこともできるし、そのお礼として背中を叩いてもらえるチャンスさえあるのだから！

大いなる精霊の小屋

みんな幽霊の話が好きだよね。だって、それが君たちのシャーマンの得意技なんだから。時々、焚き火を囲んで幽霊の話や、いろんな物語を語ってくれる。そうやって物語を語るのが、シャーマンの役目なんだから。僕たちはみんな、例えば先祖の霊のような幽霊を信じている。なぜかって？　だって、そういう話は面白いからさ。それに、先祖の霊と、もちろんシャーマンを通じてだけど、おしゃべりできるのは楽しいものだ。たとえそのために霊に何かご馳走を捧げなきゃいけないとしてもね。なぜ先祖の霊を信じているのに、君たちの誰一人として、自分の女の母親の霊を信じていないのか、考えたことはあるか？　さて、仮にあなたの妻の母親がすでに亡くなっているとして、あなたたちはどうしただろうか？　部族全体で彼女の葬儀を執り行ったはずだ。慣習に従って、花や何かを捧げるために持参したかもしれない。あなたの妻の母親の遺体は、部族の慣習に従って、例えば石で覆われるか、あるいは火葬されたことでしょうか。しかし、誰かがシャーマンに、彼女の霊と話す機会を得るために、たとえナツ一つでも渡そうとするのでしょうか？　もし誰かがそんな頼み事したら、シャーマンは呆気にとられるでしょう！　彼は多くの焚き火の場でその話を語るでしょう。なぜなら、これはまさに焚き火の物語だからです。しかし、彼自身は決してそんなことを思いつかないでしょう。なぜなら、自分の妻の母親の霊など、誰も信じていないからです。なぜそうなのか、考えたことはあるだろうか？　答えは簡単だ。君たちは先祖の霊を信じているが、君の女の母親は、そもそも君の先祖ではないのだから！　ここから明らかのように、信じられる話と信じられない話があるのだ。

さて、次のキャンプファイヤーで、誰かが立ち上がり、最も驚くべき幽霊話を聞いた後、あなたのシャーマンに「その話なんて信じない」と言い放つところを想像してみてください。そして、「そもそも、あなたの話なんてどれも信じない」と。マンモスの糞から平らな世界全体が生まれたという話も、最初の間人間が卵から孵ったという話も、とにかく何もかも信じない、と。どうなるのでしょうか？　シャーマンは、もちろん、腹を立てるでしょう。マンモスの鼻にキスでもしろと言い、もう君たちを楽しませるつもりはないと言うだろう。狩りに連れて行ってやり、病気を治してやり、薬草を集めてやり、その上、面白い話をいろいろ聞かせてやっているのに、君たちはまだ文句を言うのか、と。その上、女の子を見るだけで頭がおかしくなりそうな若者たちに、彼女をさらってこいなんて説明しなきゃならない。まるで父親が説明できないかのように。もし彼の話を信じないなら、自分たちで話をでっち上げて、それを信じればいい。彼にはもうどうでもいいことだ。少なくとも3日間は、また幽霊の話聞かせてくれと頼み続け、その際、もうすべてを信じているから、ただ面白い話をもう一つ聞かせてほしいと伝えるべきだ。認めざるを得ないが、君たちのシャーマンは話術が巧みだからな。

ご想像の通り、ネオリトでは全く事情が異なる。誰もが自分の女の母親の霊を信じ、シャーマンに御馳走を差し入れ、もし彼女がまだ生きていたら何と言うか、もう一度聞こうとするわけではない。誰もが彼女が何と言うかよく知っている。だって、君の女の母親はいつも大体同じことを言うからだ。パートナーがいるあなたなら誰でも、彼女の母親が口を開く前から、何を言うか完璧にわかっているはずだ。新石器時代はもっと繊細な現象だが、私

の話から、新石器時代の人々は少し奇妙だと推測したかもしれない。しかし、あなたが想像していたほど奇妙ではない。新石器時代の人々もまた、様々な物語を信じるだろう。違いは、新石器時代が到来すれば、何かを信じるか信じないかはもはやあなた次第ではないという点だ。もし新石器時代のシャーマンが焚き火のそばで何か物語を語ったら、それを信じたほうがあなたのためになる。決して、その話に納得できない部分があるなどと言ってはなりません。もし何か言ったら、あなたのシャーマンが怒るように彼も怒るだろうし、せいぜい「ふざけないで、もっと面白い話を続けてくれ」と頼めば済むだろう、と思っているかもしれませんが。しかし、あなたがどれほど間違っているか、想像もつかないでしょう！

さあ、集中してください。これから私が話すことは、このガイド全体の中で、あなたにとって最も理解しにくいことかもしれません。実は、新石器時代の「最優秀者」たちが、まったく何もできないというわけではないのです。新石器時代の首長も、新石器時代のシャーマンも、あなたたち（あなたのシャーマンも含めて）の誰一人として持っていない、ある特別な能力を完璧に習得している。普通の新石器時代の人間ですら、それをできる者はほとんどいないだろうが、新石器時代の首長やシャーマンたちは、それを本能的に行うのだ。さらに、その仕組みを理解した時、皆さんは驚きで口を開けたままになるでしょう！例を挙げて説明しましょう。あなたの住む近くに洞窟があると想像してみてください。そして、何気なくその洞窟にたどり着き、入り口に立っているとします。中にはクマがいるのか、それともいないのか、あなたは考え込んでいます。「洞窟の入り口で焚き火をして煙を立てたり、あるいは動物の鳴き声を真似て叫んだりして、もしクマがいるなら誘い出すのがいい」と、今すぐ言いたくなるでしょう。私が言いたいのは、何をすべきかということではありません。私が聞きたいのは、洞窟の中にクマがいると思うか、いないと思うか、ということです。まあ、いるかもしれないし、いないかもしれない、と言うでしょう。その通りです！洞窟の中にクマがいるかもしれないし、いないかもしれないと信じてはいますが、確証はありません。もし誰かに「中にクマがいるか」と聞かれたら、あなたは「分からない」と答えるでしょう。さて、ここで想像してみてください。あなたがしばらくの間、洞窟の入り口を観察していて、ついさっき、クマが中に入っていくのを見たとします。そこで、もう一度同じ質問をします。洞窟の中にクマがいると思いますか？あなたはまた呆気にとられたような目で私を見つめ、この質問が馬鹿げているように思えて答えるのを恐れています。この質問に馬鹿げたところなど何一つありません。ただ、あなたなら、そのような状況では決してこの質問を自分には投げかけないでしょう。もちろん、皆さんは「中にクマがいる」と答えるでしょう。だって、さっきクマが洞窟に入っていくのを見たばかりですから！皆さんはそれをただ知っているのです！さて、最も難しい質問です。中にクマがいると知りつつ、そこにクマはいないと信じることができるのでしょうか？私が何を言いたいのか、よく理解してもらえよう、もう一度繰り返します。あなたは洞窟の入り口に立っています。中にクマがいることは知っていますが、同時に、そこにはクマなどいないと信じているのです。そんな状況を、そもそも想像できるのでしょうか？率直に言いますが、あることを「知っている」一方で、その反対のことを「信じている」という能力は、あなたたちの理解の及ぶ範囲を超えています。新石器時代の平均的な人間でさえ、これを習得することはできないでしょう！そ

れは、彼らの中でも最も優れた者たち、つまり新石器時代の首長とそのシャーマンたちだけに可能なことなのです。

彼らがこの特別な技能を習得せざるを得ないという例を、たくさん挙げてみましょう。そのうちの1つは、皆さんもうご存知でしょう。例えば、新石器時代の首長は、自分が小屋を建てられないことをよく知っています。それにもかかわらず、自分はそれを完璧にできると信じ込んでいるのです！彼は間違いなく「偉大なる小屋建築家」という称号を自らに与え、もしほんの少しの空き時間があれば、自分がいかに小屋を建てるか皆に見せてやると固く信じているでしょう！新石器時代の人々は皆、遠くからやって来て、彼が建てた小屋を賞賛するに違いありません！その小屋はそれほど素晴らしいものになるだろうから、どの焚き火の周りでもその話が語られるに違いない！鳥たちは、うっかり彼の小屋に糞を落としてしまわないよう、その上を飛ぶのをためらうほどだろう！残念ながら、多忙な日々の中で彼にたった一日でも自由な時間を見つけることはできず、そのため彼はこの任務を、彼のために小屋を建ててくれる助手たちに任せざるを得ない。それは本来あるべき姿の小屋ではないだろうが、仕方がない、彼はその犠牲を払う覚悟ができています。これは小屋の建設だけにとどまらない。新石器時代の首長は、先ほども言った通り何もできない。つまり、弓を射ることもできないのだ。彼はそれができないことを自覚しており、例えば、その技能が命にかかわるような狩りなど、決して行こうとはしないだろう。しかし同時に、彼は自らに「最高の射手」という称号を与え、自分は弓を完璧に射ることができると信じ込むのだ！時折、キャンプで弓術大会が開催され、そこで彼は定期的に優勝賞を獲得することになる！言うまでもなく、彼は弦に触れることさえなく、誰も彼の射撃を見ることはないだろうが、矢がまさに真ん中に刺さったのは、彼の小屋の前に飾られて見物できるだろう。首長は、どんなに貧弱なサーベルタイガーでも自分を粉々に引き裂いてしまうことを、よく承知している。もし誰かが、キャンプの近くでサーベルタイガーが目撃されたら彼に告げれば、彼は小屋へと駆け込み、自分を守る手下の数を増やすよう命じるだろう。その行動は極めて迅速で、彼が残した匂いからしか、サーベルタイガーに自分の存在を悟られたくないと推測できないほどだ。それにもかかわらず、彼は自らに「偉大なるサーベルタイガー退治者」という称号を与え、キャンプの近くで目撃されたあのサーベルタイガーは、とてつもなく運が良かったのだと固く信じ込むだろう！そのサーベルタイガーは幸運だったのだ。もし新石器時代の首長と真正面から対峙していたなら、首長がサーベルタイガーを粉々に引き裂いていただろう。サーベルタイガーが首長を引き裂くことなどあり得ない！あることを知りながら、その正反対のことを信じるというこの特異な能力こそが、「大いなる精霊の小屋」の建設思想を理解する上で鍵となる。首長は、大いなる精霊と対話するために、そのような小屋を建てるよう手下たちに命じる。大いなる精霊とは何者か、とあなたは尋ねるだろうか？それは、あなたのシャーマンを介して対話できる先祖の霊のようなものだ。しかし、そこにはいくつかの微妙な違いがある。大いなる精霊を誰も見たことはありませんが、彼こそがすべてを見通していることは明白です。しかし、何らかの謎めいた理由により、彼はすべての人と話すわけではなく、新石器時代の首長にのみ語りかけ、自らの意志を伝えているのです。さらに、もしあなたが首長に「今まさに大いなる精霊があなたに何かを告げた」と告げたとしても、彼は「一体何と言ったのか」とさえ尋ねないでしょう！この無邪気な一言は、首長の耳には新石器時代の

最も厳しいタブーに対する重大な違反として響くでしょう！まるで大いなる精霊には、誰に対しても、例えばあなたに対して直接話す権利など全くなく、首長を介してのみ話さなければならぬかのように！大いなる精霊は、そのようなことをしてはいけないのだ。そうすれば、新石器時代の大きなタブーを破ることになってしまうからだ。だって、そうなったら、みんな自分から大いなる精霊と話したくなるし、焚き火の周りで精霊が何て言ったか自慢したくなるだろう。大いなる精霊は、新石器時代の人間ではないかもしれないが、新石器時代の精霊である以上、新石器時代のタブーを破ることはできない。特に、首長が最高ではないとほめかすことなど、絶対に許されないのだ。それどころか、首長こそが、大いなる精霊はすべての人々をどこからでも見ているものの、口を開くことはない、つまり言い換えれば、もちろん首長を除いては誰にも話しかけない、と示唆するのだ。それは、首長が彼のために建てさせた特別な「大いなる精霊の小屋」の中で、である。

「大いなる精霊」は実に興味深い存在であり、新石器時代の人々が「平らな世界」の至る所で、焚き火を囲んで語り合うような、多くの興味深い物語が生まれることでしょう。しかし、それはあなたたちの物語のようなものとは異なるでしょう。新石器時代は、この点において、その独自の革新性を発揮するだろうと私は推測する。例えば、あなたたちは、世界がマンモスの糞から生まれたという話を聞いている。しかし、この話は面白いという点を除けば、新石器時代の観点からは全く役に立たない。そこから、あなたたちがマンモスに対して特別な義務を負っているとは全く読み取れないのだ。例えば、あなたがたが習慣としてるように、マンモスを殺して食べてはいけない、というのは、それがマンモスの絶滅を招く恐れがあるからだ。マンモスがすべて絶滅し、もはや存在しない世界を想像できるだろうか？新石器時代には、様々な動物の絶滅を防ぐために狩猟禁止令が導入されるだろう。なぜなら、絶滅すれば間違いなく「人類の破滅」が訪れ、すべての人間が滅びてしまうからだ。あなた方のなかには、もし狩猟が禁止されれば、人間は飢えて死んでしまい、「人類の破滅」ははるかに早く訪れるだろうと考えている人もいるだろう。しかし、問題は「人類の破滅」ではない。重要なのは、新石器時代の首長が何か禁止令を出せば、君たちはその禁止令に従わなければならないということだ！彼が何か物語を語れば、君たちはそれを信じなければならない！例えば、彼が世界の創造に関する別の物語を提示したと想像してみよう。世界はマンモスの糞から生まれたのではなく、大いなる精霊が遙か昔に、巧妙な方法で作出したのだ、と彼は言うだろう。私が彼のために建てさせた特別な小屋に住む、まさにその大いなる精霊だ！最初の人間たちも、卵から孵ったのではなく、大いなる精霊が創造したのだ。それだけです。全平らな世界の創造、人間を含むすべての創造は、大いなる精霊にとって数日しかかかりませんでした。彼は、まるでその場にいたかのように、それがどのようにして起こったかを、一日一日、詳しくあなたに語ってくれるでしょう。さて、ではなぜこの物語がマンモスの糞の物語より優れているのでしょうか？それはとても簡単です！第一に、この物語を信じないことは許されません。酋長は、その特異な能力を用いて、この話を自分が作り出したこと、実際にはその場にいなかったこと、そしてそれが真実であるはずがないことを知ることになるだろう。それは、熊がさっき洞窟に入ったのだから、洞窟の中に熊がいるとあなたがたが知っているのと同じくらい、彼には明白なことだ！しかし同時に、彼は「大いなる精霊」の話が真実であり、新石器時代の人間一人ひとりにそれを信じる義務があるの

だと、固く信じ込むだろう！たとえ彼自身はその話の細部を何度か変えたとしても、常に最新のバージョンを信じ続け、あなた方一人ひとりにその信仰を厳格に求めるだろう。新石器時代において、あなたがたが何を信じるかを選択できるようなことはあり得ない。例えば、マンモスの糞の話信じ続けることなどだ。新石器時代の首長に、「あなたの話は面白いけれど、前の話の方がもっと面白かった」などと言うようなことは許されない。「大いなる精霊は、何年も前に『平らな世界全体』を数日で創造したのだから、それ以来何を作ったのか」といった、軽率な質問は、ネオリティックの首長にとって侮辱的な行為となる！「大いなる精霊が数日で『平らな世界全体』を創造できたのなら、その後、自分用の小屋を建てるための時間はたっぷりあったはずだ」といったような示唆は、大首長に対して次々と最も侮辱的な仕草を浴びせかけるようなものだ！「世界の創造は小屋を建てるよりも難しかったはずだから、大いなる精霊が自分で小屋を建てなかったということは、明らかに必要としなかったのだ」という説明も、何の役にも立たない。もし人間なら、大いなる精霊が持っているような膨大な時間と信じがたいほどの能力があれば、誰もが自分用に三つの小屋を建て、さらに近くの洞窟の壁に狩りの情景をあれこれと描いていただろう。大いなる精霊の小屋を建てることは、おそらく最善の策ではなかった。なぜなら、それを建てる者たちのために大量の食料を費やすことになり、その間彼らは狩りに行くことができなかったからだ。それに、大いなる精霊にとっては少し侮辱的だった。何しろ彼は酋長よりも優れているのだから、一体どのような理由で酋長が、大いなる精霊がどこに住むかを定めることができるのか。私たちのうち誰一人として、酋長にどこに住むべきかなどと言う勇氣はないのに、なぜ酋長は偉大なる精霊に対してそのような振る舞いをするのだろうか？もし新石器時代の酋長にそんなことを口にしてしまった人間がどうなるか、知りたくないのか？それはあまりにも恐ろしいことで、もし狩りの最中に誰かが動物に対してそんなことをしたら、その日のうちに顔面を殴られて、キャンプから追い出されてしまうだろう！誰もが、そんなことをしうる人間と同じキャンプで眠ることを恐れるだろう。狩りとは、そもそも動物を殺そうとする行為なのだ。それなのに、新石器時代の首長が、前述の状況下でその不運な男に対して、何の苦労もなく思いつき、実行させたようなことを、誰かにするなんてことは、君たちの頭には決して浮かばないはずだ。重要なのは、新石器時代においては、その説明が理にかなっているかどうかは、誰がそれを口にするかによって決まるということ覚えておくことだ。もし優れた者がそれを口にすれば、それは当然のことながら完全に正しいものであり、あまり深く考えないほうがよい。もし劣った者がそれを口にすれば、それは理にかなっているかもしれないし、そうでないかもしれない。すべては、それが新石器時代の人々が焚き火の周りで語り継いできた物語と合致しているかどうかにかかっているのだ。

これは

これを皆さんに伝えるべきか迷ったが、私はある意味でこの状況に対して責任を感じている。私は予感していたのだが、今朝から確信した。このガイドブックは、少しばかり過激すぎるのかもしれない。資料の量が多すぎると、新しい内容をきちんと吸収するのが難しくなる。次のようなことが起きた。今朝、あなた方のうちの一人がシャーマンのところへ行き、刻み棒の使い方を教えてほしいと頼んだのだ。ご存知の通り、これは計算を行うための方法であり、あなた方の部族でそれを知っているのは文字通り数人しかいない。シャーマンもその方法を知っているが、私にこう言った。「何か予感がしたんだ。あいつは悲惨な様子で、かろうじて立っているような状態だったからな」。そこでシャーマンはその人物に、なぜ刻み棒が必要なのかと尋ねた。すると彼は、「新石器時代の人間になりたい」と、曖昧な言い訳をし始めた。そこでシャーマンは、当然ながらそれを私と結びつけた。彼を少し口を開かせると、そのお人好しは昨晚、妻の元に戻り、ネオリトについて語りふけていたことが判明した。ネオリトの人は、どんな行動にも二つの言葉を使い、それが実は同じことだと全く気づかないのだと。彼の女はそれを自分なりに解釈し、彼に様々な要求をし始めた。シャーマンはあれこれと察したので、ただ「何回?」と尋ねたところ、彼は「たくさん」と答えた。ご存知の通り、この言葉は「いくつでも」という意味になり、3つ以上の数を表すときは常に使われます。そこでシャーマンは恐怖に駆られ、刻み目のある棒の使い方をすっかり忘れてしまったと言い、その日の狩猟を即座に免除し、彼に何かのハーブを飲ませました。男は小屋で眠りについたが、眠りにつく前に、洞窟に熊がいる、いや熊はいない、などと支離滅裂なことを呟いていた。しかしシャーマンは、あのハーブを飲めば誰でもあり得ないことを口走るものだと知っていたので、それは薬のせいかもしれないと思った。それでもなお、残りのことはあの女性から聞き出した。彼女も同じ質問に「たくさん」と答えたが、さらにシャーマンに、自分は常に新石器時代の女性だと感じていたこと、そして部族全員の前で目立ってしまうのは嫌だから、誰もが最新のトレンドに従うべきだと語った。

皆さん、ここにある種の誤解が生じてしまいました。そして、それは大部分が私の責任だと認めます。最初から説明しましょう。私は、新石器時代の人間にあらゆる行動に対して2つの言葉があるとは決して言っていません。単に、ある行動に対しては少なくとも2つの言葉があり、その言葉の意味合いは、誰がそれを行うかによって異なるということなのです。とはいえ、新石器時代の人間の言語が、皆さんの言語よりも特別に豊かになるわけではありません。ただ、異なるだけなのです。シャーマンが尋ねたような特定の行為を含め、新石器時代の人間は、おそらくその行為を表す言葉自体を持っていないでしょう! 昨晚行われたような会話は、新石器時代の人間の言語には到底翻訳できないのです! 彼には適切な言葉が分からないのです! 彼は身振り手振りで自分の意図を示すだろう。なぜなら、もし特定の行為に名前を付けようとしても、彼にはそれに対して極めて侮辱的な言葉しか思い浮かばないからだ。単に、ある言葉は増え、別の言葉は減り、あるいは完全に消滅することさえあるだろう! 一部の言葉は依然として存在するが、その意味は変わる。新しいタブーが現れ、古いタブーの一部は消えてしまうかもしれない。実のところ、この現象は皆さんの中にも存在しています。新石器時代ほど極端な形ではありませんが。例えば、新石器時代の首長は嘘つ

きだと思った方もいるかもしれません。なぜなら、彼はあることを信じつつも、それが真実ではないと知っているからです。嘘は当然タブーです。もし誰かが真実を語らないなら、その人を信じることはできず、頼ることもできません。では、私なりに尋ねてみたいのですが、「真実」とは一体何なのでしょう？ 実は、「真実」という言葉の意味は、旧石器時代と新石器時代では全く異なるのです！嘘は新石器時代であっても依然としてタブーであり、変わるのは「真実」とは一体何なのか、その意味だけなのです。君たちは嘘をつかないよう努めているが、考えてみてほしい——君たちのシャーマンが、刻み棒の使い方を忘れてしまったと言ったのは真実だったのだろうか？厳密に言えば、彼は嘘をついたのだ。しかし、シャーマンが常に真実を語れるとは限らない。君たちもそれをよく知っているはずだ。彼はその男のためにできる限りのことをしたのだ！彼に薬草を飲ませ、休養を与えた——もし彼が、その男に刻み棒の使い方を教えなかったとして、彼を責めるだろうか？もちろん、そんなことはない。あの男は、たとえ完全に健康であっても、それを理解することはできなかつただろう。なぜなら、それには長い時間と練習が必要だからだ。きっと皆さんは気になっているだろう、「新石器時代の人々にとっての『真実』とは一体何なのか？」と。それはとても単純だ！真実とは、新石器時代の首長が言うことだ！新石器時代の集落の住人たちが、嘘ほど忌み嫌うものはないと断言できる！その点において、彼らを完全に信頼することができる！もし新石器時代の人間の誰かが寝言を言い出したら、その妻はすぐに彼を起こします！なぜでしょうか？うっかり嘘をつかないようにするためです！もし何らかの理由で彼に不満があれば、彼女は上役に告げ口して、「あの男が寝言で、新石器時代の首長よりも弓の腕が上だなんて嘘をついた！」と訴えることができるのだ！このような行動に関わるあらゆる微妙な点を説明するのは、私の翻訳能力を超えているし、間違いなく皆さんの理解力を超えているだろう。しかし、恐れることはありません。皆さん一人ひとりが、本物の新石器時代の人間のように考える術を身につけることができます。ある人には時間がかかり、ある人には短時間で済むでしょう。まあ、そういうものなのです。

この話には、もう一つ注目していただきたい興味深い点があります。皆さんはきっと、もし新石器時代のシャーマンが、皆さんのシャーマンの立場に置かれたらどうしただろうかと考えていることでしょう。その人は狩りから免除されるべきかどうか、どうやって判断したのでしょうか？本当に病気なのかどうか、どう見極めたのでしょうか？新石器時代の首長の小屋に駆け込んで、それを尋ねたのでしょうか？もちろん、そんなことはしません！あなたのシャーマンは、一目見ただけで何かがおかしいと察し、その状態では狩りに出させるわけにはいかないと判断しました。その男が弓を引き絞ることもできないだろうと、ただそれを見ただけで分かったのです！では、新石器時代のシャーマンならどうでしょうか？彼もまた独自に判断を下すでしょうが、その基準は少し異なるものになるでしょう。

この微妙な違いを説明するために、まず皆さんがすでに察しているかもしれないことについて触れておかなければなりません。誤解を避けるために、念のため説明しておきます。つまり、ネオリットでは、皆さんがそうしているように、皆で一緒に食事をしたり、少なくとも隣人と様々な料理を交換したりすることはありません。また、肉がすべて一か所に保管され、誰もがその場所を知っているようなことはありません。絶対にありません！新石器時代の人々はそれぞれ自分の食料庫を持ちますが、誰もがその存在を誰にも知られないよ

うに努めるでしょう。可能であれば、何とかしてそれを偽装し、隠そうとするはずです。また、重い石の下に食料を隠すことも一般的な手段となるだろう。その石を持ち上げるにはかなりの力が必要だ。さらに、様々な隠し場所、持ち物を地中に埋めること、自分だけが知っている洞窟に隠すことなどが加わる。新石器時代のシャーマンたちは、まさにこの目的のために、すでにオオカミの家畜化に取り組んでいる。「なぜ狼が必要なのか、誰かを噛むかもしれないのに？」と疑問に思うかもしれない。しかし、まさに「誰かを噛む可能性がある」からこそ、彼らには狼が必要なのだ！ただ、そのような飼い慣らされた狼は、まず誰を噛むべきで、誰を噛んではいけないかを学ばなければならない。それが「新石器時代の狼」であり、つまり誰が優れていて、誰が劣っているかを正確に理解しているということだ。「上」の人、つまり食料庫を見張っている人を見れば、噛みつくことなど考えもしない！一方、下位の者を見かけたら噛みつき、その見返りに上位者から肉をもらうことさえある！新石器時代の首長の食料庫でさえ警備されるが、それでもその場所を特定するのは比較的簡単だ。単に、何人の武装した首長の側近が警備しているかを数えればよい。首長の武装した手下の数と、食料庫の中身とは一体何の関係があるのだろうか？首長の武装した手下の数は、何か美味しいものを焼いている焚き火の煙のようなものだ！だからこそ、新石器時代において、数える能力は、クマにとっての嗅覚と同じくらい重要になるのだ！新石器時代の人間は皆、食料庫と少なくとも1つの隠し場所を持っていると理解した以上、新石器時代のシャーマンもまた、自分専用の食料庫を持っていることは明らかだ。ただ、シャーマンの方が優れているのだから、その食料庫は少し大きく、隠し場所もたくさんあるだろう。食料庫と、シャーマンが免除を許可する決定とは、一体どのような関係があるのでしょうか？免除は、お腹を空かせている人ではなく、病気の人に対して与えられるものではないのでしょうか？そうお考えでしょう。しかし、それは間違いです。新石器時代のシャーマンの食料庫は、極めて重要な意味を持っています。ご存知の通り、どのシャーマンにも、あなたのシャーマンにも、何かご馳走を持参しなければなりません。あなたのシャーマンなら、何か持っていくと約束するだけで十分です。彼はあなたをよく知っているからです。シャーマンに美味しいものを差し出すというこの習慣は、新石器時代にも受け継がれます。問題は、もし何も持っていかなければ、あなたは「健康そのもの」と見なされてしまうということです！何か持っていけば、彼は「体に気を付けなさい」と言うでしょう。もっと大きなものを持ち込めば、あなたの健康状態が彼の懸念を招くことになります。さらに多く持っていけば、彼はあなたに薬草を飲ませ、休養を命じるかもしれません。そして、あなたがかろうじて持ち運べるほどの量の食べ物を持っていったとしても！そんなに大量の食べ物を自力で運べたのだから、何も病気ではなく、熊のように強いと彼は言うと思うのでしょうか？まったく逆です！あなたの状態は彼を恐怖に陥れるでしょう！彼は、あなたがまだ生きていること自体に驚いていると言います、休養を命じ、数日後にまた来るように言うでしょう。その時は、今の生ける屍のような姿ではなく、もっと人間らしい姿になってから、と……

タブー・タブー・タブー

今日は、新石器時代のタブーの中でも特にユニークなものについて見ていきましょう。これは、皆さんがこれまで聞いたこともないようなタブーです。たとえ部族全員で何日も座り込み、奇妙なタブーを思いつくことだけに専念したとしても、これほど奇抜なタブーを自分たちで考え出すことはできなかつたでしょう。もちろん、あなたたちにはそれを表す言葉などありませんが、新石器時代の人々なら少なくとも2つは持っているだろうと予想していることでしょう。しかし、少し驚かせてしまうかもしれません。彼らにもそれはない。これは特別なタブーとなるだろう。この章のために、私はそれを「タブー・タブー・タブー」、あるいは「制定も破ることも許されない禁令」と名付けた。この名前は奇妙に思えるかもしれませんが、すぐにすべて説明します。まず教えてほしいのですが、何かがタブーだとうどうやってわかるのですか？ そうですね、何よりもまず、焚き火を囲んでの物語からでしょう、とあなたは言うでしょう。幼い頃から聞いてきた様々な古い物語から。そうした多くの物語からは、何かが禁じられていることがはっきりとわかります。実際、父親やシャーマン、あるいは同世代の仲間たちからも少しは学んでいる。様々な情報源からだ。では、もし何かが禁じられていないとしたら？ 「そう、禁じられていないんだ」と君たちは言うだろう。その場合は、誰もそれを禁じていないのだから、やっていいことになる。単純な旧石器時代の理屈で考えれば、確かにその通りだ。しかし、新石器時代は、私が示そうとしたように、人間に新たな課題を突きつけます。その新たな課題に立ち向かうために、新石器時代の人間は、「定めても破ってもならない禁じ事」を考案しました。そして、これは決して、ごく一部の者だけが知るような特別な知識ではありません。これは、例えを使うなら、新石器時代の「刻み棒」のようなものではない。むしろその逆だ。新石器時代の人なら誰でもこれを理解しているが、そのようなタブーがそもそも存在することを認める者は誰もいない。もし認めたら、ある意味でその禁止事項を破り、タブーを犯すことになるからだ。しかし、決してそれを越えることもない！ 皆さんの目が曇り、表情にはあまり理解が表れていないようだ。それでは、具体例に移りましょう。

皆さんの多くは兄弟姉妹がいるでしょう。姉妹については人それぞれですが、中には性格がひどく意地悪な子もいて、誰かが彼女を誘拐してくれる日を心待ちにしている人もいるはずです。彼女とはあまり話さない人も多いただろう。だって、彼女には彼女でやることがあるし、君たちにも君たちでやることがあるからだ。それでも、もし「お前が誘拐される日が待ち遠しい」なんて言ったら、姉は手近にあるものを投げつけてくるだろうし、大抵は命中するだろう。その時はハチのように怒るだろうが、実は彼女自身もその日を待ち望んでいるのだ。ただ、誰にもそれを認めないだけだ。兄ももちろん意地悪な性格かもしれないが、それでも兄は兄だ。少なくとも、あなたたちの住む旧石器時代ではそう言われている。もっとも、新石器時代では、この言葉は場合によっては少し奇妙な意味合いを帯びてしまうだろう。その理由は、すぐに説明する。

これまで、このネオリトには「劣った者」にとっては欠点があるように思えたかもしれませんが、「優れた者」にとっては、やはりこれやあれといった魅力があるのも事実です。あなたの直感は、概して正しいのですが、ネオリトにおいて「最高の者」でさえ、それ

ぞれの問題を抱えているのです。その理由をすぐに説明しましょう。あなたが真のネオリット人であり、しかもその中の最優秀者の一人だと想像してみてください。あなたには多くの兄弟がおり、つまり彼らも皆ネオリット人であり、同様に最優秀者の一人なのです。さて、ある日、あなた方の兄弟の一人が、まもなく新石器時代の首長の首飾りを授かるという嬉しい知らせが届いたと想像してみてください！きっとあなたは、その兄弟の首長ネックレス授与式にふさわしい姿で臨むために、近くの川で体を洗ったり、マンモスの脂を髪に塗ったりすべきだと思っていることでしょう。それに、自分用に何かかっこいい称号を思いつくのも悪くないでしょう。そうすれば、皆が「君は昔から夢見ていたこと、でもいつもそここの出来だったあのことを、見事にこなせるんだな」と思ってくれるはずです。新石器時代のことだから、その考えは半分正解で、半分間違いでもあります。式典があなたたちを素通りすることはないという点では、確かにその通りです。しかし、川で水浴びをしたり、マンモスの脂を髪に塗ったりすることが、決してあなたの主な問題ではない。あなたの主な問題は、実のところ、あなたはすでに死んでいるということだ。あなたは、狩りの最中にサーベルタイガーを見逃してしまった人間と同じくらい死んでいる。だが、そのサーベルタイガーはすぐそこにいて、もうすぐ、トラたちが最も好むことをあなたにしようとしているのだ。新石器時代には、誰にとっても喜ばしいニュースなどないという特徴がある。ただ、新石器時代の人々は、彼ら特有の気楽さゆえに、それをできるだけ良い話に聞かせたがるのだ。もしあなたの兄弟が新石器時代の首長になったなら、あなたや他の兄弟たち全員に、まもなく何らかの不運な事故が降りかかることは間違いない。興味深いことに、あなたたち一人ひとりに起こる出来事は全く異なるものになるだろう。なぜそうなるのか？それは、新石器時代の不変かつ極めて特徴的な性質として、新石器時代の首長の家族における高い死亡率があるからだ。この死亡率は、隣人や友人、時には知り合いにまで波及し、彼らをも巻き込むことになる。さらに、新石器時代の人間は皆、この事実に関心を感じていない。彼にとって、これは極めて自然なことなのだ！もし、あなた方の旧石器時代の集落で数人の兄弟に不幸な出来事が起こり、たった一人だけが生き残ったとしたら、あなた方はその事実に関心を受け、長い間語り継ぐことになるだろう。たった一人しか生き残らなかったという事実は、あなたたちには奇妙に思えるだろう。新石器時代の人も好奇心旺盛で、質問するのが好きだ。しかし、新しい新石器時代の首長の兄弟たちがどこにいるのか、一体彼らに何が起きたのかという質問は、彼にとってあまりにも興味のないことのように思えるため、彼は決して、絶対にそれを尋ねたりはしない。まさか誰かが彼にそのような質問をするのを禁じたのだろうか？誰も彼にそれを禁じたわけではない！彼は、まさにその瞬間、全く別の問題——まったくの偶然にも、新しい首長の兄弟とは全く無関係な問題——に最も心を奪われているかのように振る舞うだろう！これまで全く気にも留めていなかった様々な疑問を、突然掘り下げ始めるかもしれない。まるで、新ネオリティック族長の兄弟たちが、そもそも存在したことさえ突然忘れてしまったかのように見えるだろう！たとえ彼らのことを知っていたとしても、たとえ長い間毎日背中を叩かれていたとしても、彼は彼らについて一言も口にしない！この奇妙な現象は、傍目には、誰かが彼に彼らについて尋ねることを禁じたかのように映るかもしれない。しかし、ネオリットでそのような質問を禁じることは許されない。なぜなら、そのような禁止令は、誰かがその質問を気にかけていることを意味してしまうからだ。

そもそも、なぜ誰かがそんな奇妙な質問を気にかける必要があるだろうか？ この質問は、言うまでもなく、誰の関心事でもあってはならないのだ！ これこそが、誰によっても決して制定されたことのない禁令の好例であり、誰もが、それを制定すること自体が許されないかのように振る舞っている。しかし、それを破ることも許されないのだ！

公益

今日は、新石器時代の人々にのみ特有の、特別な言葉をご紹介します。旧石器時代の人々は誰もこの言葉を生み出しませんでした。実は、ここでちょっとした秘密をお教えしましょう、それには十分な時間があったのです。その意味は、きっとすぐに理解できるはずです。その意味を説明したら、皆さんは今までどうやってそれなしでやってこられたのか、と驚くことでしょう。しかし、もし新石器時代がなかったとしても、この言葉がなくても、おそらくまだしばらくの間はなんとかやっていけたのではないのでしょうか。新石器時代の人間は、この言葉を持たなければならず、それなしでは耐えられないのです。皆さんはきっと、それがどんな言葉なのか気になっていることでしょう。お伝えしましょう。というのも、すでにお気づきでしょうが、新石器時代の人間が使う言葉をすぐに理解できることはめったにないからです。その言葉とは、「大衆の利益」です！

「全体」とは何のことか、と尋ねるでしょう？ そう、「全体」とは、集落全体、そこに住むすべての人間を意味します。首長やシャーマン、あるいは狩人だけではありません。「全体」とは、集落のすべての女性、すべての少女、すべての幼子、さらには口を開けて母親に乳を飲ませてもらうことしかできないような、ごく小さな子供たちまでもを指します。彼ら全員が「全体」を構成しているのです。母親が抱っこしている、ただ食べて、うんちをして、泣き叫ぶことしかできないごく小さな赤ん坊でさえ、その子もまた「全体」の一部なのだ。新石器時代において、「全体」とは優れた者たちだけを指すのだと思うかもしれない。決してそうではない！新石器時代においても、「全体」とは依然として集落のすべての人々、つまり優れた者も劣った者も含むのだ。周知の通り最高である新石器時代の首長から、侮辱的なジェスチャーを誰にも見せることさえできない最低の新石器時代の人間まで——彼ら全員が「全体」を構成するのだ。そう考えると、この新石器時代全体はそれほど奇妙なものではないと思うかもしれない。よく言われるように、肝心なのは細部にあるのだ。新石器時代の人間は誰でも、「大衆の利益」という言葉を耳にすれば、反射的に口を閉ざし、神経質に周囲を見回し、まるで森の中でまだ温かい熊の糞を見つけたばかりの狩人のように振る舞う。ご存知の通り、そのような場合は最大限の注意を払い、わずかな物音にも気を配り、武器を構えなければならない。なぜなら、近くに熊がいるからだ。まだ温かい熊の糞と「公共の利益」に何の関係があるのか、とあなたは問うだろう。新石器時代には、クマでさえ習性を変え、人間の声で話すことを覚え、糞をする代わりに森を歩き回り、時折「公共の利益」と吠えるようになるのだろうか？ 重要なのはクマではなく、慎重さだ。もし新石器時代の人間がこの言葉を耳にすれば、すぐさま近くに自分より優れた存在がいると悟るだろう。それは肉を集める者かもしれないし、肉を集める者よりも優れた者かもしれない。あるいは、新石器時代の首長の中でも最高の者かもしれない。皆さんはもうその意味を理解したつもりだろう——新石器時代において、新石器時代の首長を筆頭とする「優れた者たち」が、時折この言葉を使う習慣があるのだと。その直感は基本的に正しいのですが、本質を捉えてはいません。例を挙げて説明しましょう。マンモスがリスより大きいと言う人がいるのでしょうか？ 誰もそんなことは言わないでしょう！ マンモスが巨大で、リスがちっぽけだということは、誰もが知っていることです。これはまさに、あることが（旧石器時代

の理解において) 真実ではあるものの、本質を捉えていないというケースです。新石器時代の首長がこの表現を好んで使うと言うだけでは不十分です。彼は、実質的にそれ以外のことを話すことはないでしょう! 様々な物語からご存知の通り、こうしたことは旧石器時代にも時々起こるものだ。どこからともなく、ある人間——たとえ優秀な狩人であっても——が、同じことばかりを話し始める。それは非常に長く続き、エスカレートすることもある。彼は最も奇妙な考えを思いつくかもしれない。例えば、自分一人でサーベルタイガーを噛み殺すとか、熊に弓の射方を教えるとか。そんな時は、部族のシャーマンのところへ連れて行かなければならない。シャーマンは彼に様々な薬草を試すだろうが、たいていは手も足も出ない。そんな男を狩りに連れて行くのは恐ろしい。できればキャンプに留まらせ、誰かが彼を監視しておくのが最善だ。

新石器時代の特徴的な点は、新石器時代の首長が「公共の利益」以外の何物についても語らないにもかかわらず、それが誰一人として不思議に思わないということだ。誰も彼に、少し休んだり、新鮮な空気の中で息をついたり、他のことを考えてみたりするよう言う者はいない。新石器時代のシャーマンで、首長がいつも同じことばかり言っているからといって、彼のために特別な薬草を用意しようなどという発想を持つ者は、絶対に一人もいないだろう。それどころか、新石器時代の首長の言葉には誰もが最大の関心を寄せて耳を傾け、それをできるだけ記憶に留めようとするだろう。新石器時代の首長の演説を数多く暗記している者は、どこへ行ってもそれを自慢し、誰かより優れた人物からその功績を称えられ、背中を叩かれるチャンスさえあるだろう。では、新石器時代の首長は一体何を語るのだろうか?

実は、彼の人生そのものが、公共の利益のための絶え間ない犠牲の連続なのだ。彼は、ヘラジカを狩るオオカミの群れさえも凌ぐ粘り強さで、この目標に身を捧げている。公共の利益のせいで眠れず、そのことを考えるだけで食欲も失せる。それにもかかわらず、誰も彼を評価してはくれない。例えば、1頭のサーベルタイガーを食い殺すのに何人の狩人が必要かを突き止めるための、彼の研究の深遠さを評価する者は誰もいない。この研究の目的は、言うまでもなく、もっぱら「公共の利益」のためであり、彼はそのコストを最小限に抑えるよう、精巧に計画を練っている。損失はごくわずか、事実上ゼロであり、それはまだどのサーベルタイガーにも何事も起きていないことから明らかだ。彼はすでにそれに慣れ、誰かがいつか彼の献身の大きさを評価してくれるという希望も失ってしまった。彼が自らに授けた相応の称号によって証明された、数多くの才能と技能を、彼は絶えず「大義」のために捧げ続けている。もし自分がいなくなったら、このキャンプはどうなってしまうのかと思うと、身震いがする。彼の賢明な指導がなければ、キャンプ全体は間違いなく滅亡するだろう。もしかすると、その最終的な破滅の瞬間、誰かが彼の墓に花を供え、涙を流してくれるかもしれない。

新石器時代の首長はこうしたこと、あるいはそれに類することを語り、そこに居る者たちは皆、息をのんでその演説に耳を傾け、それを暗記しようと努めるだろう。そして、誰一人として、たとえ小さな咳払いさえも許されない。新石器時代の首長の演説中に、コメントはおろか、咳払いをすることさえ、彼に対する侮辱的な行為とみなされるのだ。出席者一人ひとは、もし咳き込んだら厳しい罰が下されることを十分に理解している。その罰と

は、旧石器時代におけるキャンプからの追放のようなものだが、新石器時代はこの点においてやや過激になるだろう。とはいえ、新石器時代にはこの規則から若干の微妙な例外が存在する。もし新石器時代の首長が演説の中で、自身を襲った数々の不幸を列挙し、それらを常に岩のように不動の心で耐え抜いてきたと語ったとしても、それは全くもって当然のことであり、聴衆の誰も微かな音さえ発することはないだろう。しかし、首長が、首飾りの授与式が行われた日がどれほど辛い日だったかを、たとえ式から何年も経ってからであっても、口にしようものなら、ちょうどその時期に偶然にも亡くしてしまった肉親について何かを語る前に、その場に居合わせた誰かが間違いなく喉に違和感を覚え、本意でなくとも、うっという声を漏らしてしまうだろう! さらに、そのことで罰せられることも決してない。ネオリタにおいて、首長の話を聞く聴衆の一人がそのような状況で喉に違和感を覚えるのは、ごく自然なことだ。むしろ、避けられないことだとさえ言える。なぜそうなるのか、私が説明するのは難しいが、少なくともこれだけは覚えておいてほしい。新石器時代にはタブーが現れるが、時にはそれを破ることも可能であり、そのようなタブーの破りによって誰にも何の危険も及ばないということだ。もしその後、誰かが聴衆一人ひとりに首長の演説を復唱するよう頼んだとしたら——例えば、それぞれの演説のバージョンを比較するためだとしよう——それらはすべて、ある特徴的な、純粋に新石器時代特有の性質を持つことになるだろう。彼らの多くは、演説の大部分を記憶しているだろう。中には、その演説を一字一句覚えていて、あなたに語ってくれる者もいるだろう。しかし、そこにいた誰一人として、その場にいた誰かが「うっ」と声を漏らしたことは口にしない。それをした本人でさえ、そのことを忘れてしまうのだ!

服を着るのだ!

ご存知の通り、私たちは皆、服を着ている。まあ、そういうものなのだ。とても暑い時は腰布だけでもいいが、寒い時は様々な動物の皮で作られた服を着る。皆さん、大まかに言えば似たような格好をしているが、一人ひとり少し違うように見える。ここで秘密を一つ明かそう。新石器時代の人間の視点から見れば、ここに立っている皆さんは皆、全く同じ格好をしているのだ! 誰も特別に目立つところなどない! もし新石器時代の人類がここに立ち、あなたたちを一瞥したとしても、彼を悩ませる基本的な疑問に答えることはできないだろう。正確には二つの疑問だ。第一に、あなたたちが自分より劣っているのか、優れているのか分からない。第二に、誰が最も優れているのか、見当もつかないだろう。この二つの問いは、皆さんにとっては、おそらくかなり奇妙に聞こえるだろう。とはいえ、新石器時代の人にとっては、これらのごく自然なことであり、自然と頭に浮かぶに違いない。これらの問いへの答えを見つける上で、新石器時代の人にとって、皆さんの服装を評価することは非常に大きな助けとなる。彼にとって、服は皆さんよりもはるかに重要なものなのだ。

もし、あなた方の誰かが「服を着ずに歩き回り、その姿で狩りに行こう」と考えたとしたら、あなた方はどう反応するだろうか。もしその人が、「熊に変身したいから、毛皮が生えるように裸でいなければならない」と主張したなら、話は簡単だ。あなたのシャーマンは、マンモットたちが協力する気がないため、今日の狩りは中止だとその人に告げるだろう。しかし、それは問題ではない。なぜなら、シャーマンは彼のために特別に魔法のハーブを用意しており、それはクマへの変身を早めるだけでなく、毛皮の成長にも大いに役立つからだ。シャーマンが彼にそのハーブを飲ませれば、彼は眠りにつき、少なくともしばらくの間は問題は解決するだろう。なぜそんな男を狩りに連れて行かないのか? だって、彼は変だからだ。そんな男はクマに近づいて話しかけようとするかもしれないが、クマが保守的であることは周知の事実であるため、おそらく誤解を招くことになるだろう。つまり、服を着ることは、誰も特に命じたわけではないのに、あなた方一人ひとりにとって、ある種の義務のようなものになっているということだ。新石器時代の人にとって、この義務はあなた方一人ひとりよりもさらに重要なものとなるだろう。新石器時代の人間は、誰かに裸を見られるという状況を恐れるだろう! そのことを考えるだけで、恐怖のあまり死にそうになるほどだ。衣服は彼にとって、人生で最も重要なもののひとつとなる。興味深いことに、新石器時代には、誰も彼に裸で歩くことを禁じたりはしない。新石器時代の人間は、もちろん「大いなる精霊」が定めた、多種多様な禁止事項や命令の数々を暗記するだろう。しかし、その数多くの禁止事項や命令の中に、「服を着よ!」という命令は決して現れない。なぜそんな命令が出る必要があるだろうか? 大いなる精霊は、むしろ「最善を尽くせ」、つまり「できるだけ多くを手に入れよ!」という命令を下すこともできたはずだ。大いなる精霊は、新石器

時代の人間なら誰でも、命令などなくともそう行動することをよく知っている。だからこそ、そのような命令は決して出さないのだ。この点において、新石器時代の人間に完全な行動の自由を与え、何事も強制することはない。新石器時代の人間が、服を着ずに歩くことを恐れることはすでに分かっている。それだけではない。さらに、新石器時代の人間は皆、適切な衣服を身に着けることで、自分が優れていることを強調しようと努めるだろう。ある種の衣服は、自分より劣る者には一切着用が許されない。新石器時代の人間が適切な「称号」を持っていることを示す服装の要素も現れるだろう。一部の服は信じられないほど着心地が悪い。あまりにも不快なため、それを身にまとった新石器時代の人間は自由に動くことさえできなくなる。もちろん、これは最も優れた新石器時代の人間にのみ当てはまる。たとえ遠くからでも、自分より優れた人物を見かけたら、たとえ声が聞こえないほど遠くにいても、その人が自分より優れていることは確信できるだろう。例えば、それが肉を徴収する集団であるなら、その中の最優秀者が「公共の利益」と口にする前から、あなたはそれを知ることになるだろう。

「新石器時代の女性たちはどうだったのか？」と、皆さんは尋ねるかもしれません。このことについてお話しすべきか、私は迷っていました。これは少々デリケートな話題であり、率直に語るのは難しいからです。そこで、ある情景を例に挙げてお話ししましょう。想像してみてください。新石器時代の人であるあなたが、一日中狩りをした後、新石器時代の女性のもとへ帰ってきたとします。すると、すぐに何かがおかしいと感じます。彼女はあなたを全く見ようともせず、一言も話しかけてきません。やがて、彼女が新しい服を欲しがっていることが分かります。あの女、彼女の親友が新しいネックレスを手に入れ、まるで自分の方が彼女、つまりあなたの新石器時代の女性より優れていることを示そうとするかのように、もう3日もそれを身につけて歩いているのです。それに加えて、あの女は皆にこう言いふらしている。「私の新石器時代の人間は、もうすぐ誰かより優れた人物に背中を叩かれることになる」と。そして、もうすぐ二人は近所中の人々に、彼らの立場にある者が示すことのできる最も侮辱的な仕草を見せつけるつもりだ。そんな光景は、あなたがたがネオリットについて知っていることさえ考慮しても、あまりにもあり得ないように聞こえると思うだろうか？ こう言おう。何かがあり得ないように聞こえるかどうかは、それを評価する者次第なのだ。もしネオリットの住人に、ネオリットでそんなことが起こり得るか尋ねたら、多くの人が泣き出してしまふかもしれない。率直に言おう。あなたのネオリットの女性に、「もう一着服を持っているじゃないか」と指摘するのは、あまり賢明な考えではない。そのような行動は、よく考え抜くべきだ。新石器時代のあなたの妻に、着る服がないというわけではない。ただ、それが真実であろうとなかろうと、時には口に出さない方が賢明なことがあるのだ。もしそう言ったら、近所の女性たちの首飾りを含め、すべての服や装飾品の詳細な説明を聞かされる羽目になるかもしれない。あなたは口を開けたまま立ち尽くし、誰かがこれ

ほど多くの詳細を記憶できることに驚いてしまうだろう。その説明のすべてから、彼女が新石器時代の女性たちの中で最悪であり、そのすべてがあなたのせいであることが明白に示されるだろう。周囲の人々が、彼女に対して侮辱的なジェスチャーをする以外に何もしていない様子を、ただ見ているだけになるだろう。

歌の上手な彼

ご存知の通り、焚き火は旧石器時代のキャンプ全体の生活の中心だ。焚き火の周りでは、様々な物語を語り合ったり、皆で歌を歌ったりする。歌は常に皆で一緒に歌うものであり、それらは物語と共に、ある意味であなたたちの部族の歴史を内包していることに気づいてほしい。焚き火のそばで、ある少女をじっと見つめる若者が少なくありません。これは、彼がまもなくその少女に夢中になることをはっきりと示しています。もちろんその少女を除いて、ほぼ全員がそれに気づくでしょう。教えてほしい。焚き火の周りで、多くの人が同時に物語を語り合うような事例を聞いたことがあるだろうか？ そんな話は聞いたことがないはずだ。だって、それはかなり非現実的だからだ。いつも、話しているのはあなたたちのうちの一人だけなのだ。では、誰が焚き火のそばで物語を語ることができるのか？ まあ、基本的には、語りたい人なら誰でもだ。語るのが上手な人もいれば、下手な人もいる。それに、いつも面白い話を用意している人もいる。例えば、あなたたちのシャーマンだ。だからこそ、みんな喜んで彼の話を聞くのだ。新石器時代において、焚き火のそばで物語を語った者は、自動的に優れた存在となる。新石器時代の人間は皆、ただひたすら焚き火のそばで何かを語ることだけを夢見るようになる。それなら何が問題なんだ、語らせればいいじゃないか、とあなたは言うかもしれない。しかし、新石器時代では、どんな物語でも焚き火のそばで語れるわけではないのだ。だって、誰かが全然面白くない話をしたり、あるいは嘘をついたりするかもしれないからだ！ だからこそ、その人が自分の物語を語ってよいかどうかを決めるのは、そのために特別に任命された首長の補佐役の役目となる。物語が面白いかどうかを判断するのは彼だ。焚き火の周りで定期的に話す者もいるだろう。たとえ新石器時代の首長の演説を何度も繰り返し語ったとしてもだ。しかし、話のテーマは実に多岐にわたる。驚くかもしれないが、旧石器時代に関する話が大人気になるだろう。旧石器時代の物語を語る機会を得た者は、ここにいる皆さん全員が、旧石器時代を通じて、服も着ずに森を歩き回り、様々な気持ち悪い虫を食べ、その後、その虫が喉を通る感覚を皆に語ることにしかしていなかったと信じ込むでしょう。もしかすると、彼は数日間もキャンプ地を離れて森を歩き回り、様々な虫を貪り食うかもしれない。そして、それによって旧石器時代のすべての秘密を掌握したと思込むだろう。その後、彼はキャンプ地に戻り、焚き火を囲んで皆に自分の体験談を語り、飲み込んだ虫たちが自分の喉の中でどう動いていたかを詳細に描写するだろう。なぜそんな奇妙なことをするのか、とあなたは尋ねるだろうか？ それはもちろん、焚き火の周りで自分の物語を語れるという機会を得ただけで、彼はより優れた人間になり、さらに優れた誰かから背中を叩いてもらえる大きなチャンスを得られるからだ。その際、彼は旧石器時代を手のひらで転がしていると思込み、虫を食べるのがどれほど楽しかったかを皆に語り続けるだろう。もちろん、もし本当にそれが好きだったなら、今でも服も着ずにその森に座り込み、虫を食べ続けているはずだということに気づかないだろう。残念ながら、ある日、次の

焚き火の場で自分の物語を語ろうとしている時、計画が変わり、自分の物語はもう面白くないと知ることになるに違いない。彼は、誰が物語を語っていいかを定める人物のもとへ駆け寄るだろう。そして、自分が夢見ているのは、旧石器時代に関する深い知識を聴衆と分かち合い続けることだけだと訴えるのだ。もしかすると、彼は気持ち悪い虫を1匹連れてきて、今すぐ服を脱いでその虫を丸呑みし、その動きについて詳しく語ると提案するかもしれない。すると、その相手はほぼ間違いなく、コンセプトが変わったから、その虫を持って近づいたり、飲み込んだりなどしてはいけないと告げるだろう。この話はもう面白くない、それだけのことだ。皆は今、同じく旧石器時代を手のひらで転がすような、別の新石器時代の人間の話を聞きたいと思っている。それに、彼（つまり焚き火のそばにいる男）は、これ以上自分に注目してもらえないと思っている。

同じ物語が時として面白く、時として面白くないという新石器時代のこの特質は、新石器時代の歌にも反映されるだろう。新石器時代には、ただ一人だけが歌い、他の全員が聴くという習慣が生まれる。しばらくの間、どの焚き火の周りでも、どこかの新石器時代の人物が歌い、皆がそれを聴きたがるだろう。なぜか？ だって、歌が上手いから！ 皆さんがこの件について独自の意見を形成する前に、ある情景を話そう。何日も狩りをした後、新石器時代のキャンプ地に戻ると、遠くから奇妙な音が聞こえてくると想像してみてください。恐ろしい音です。まるで動物を仕留める時の音のようなのに、どこか人間の声にも似ています。そんな声を上げている人間には、誰かが恐ろしいことをしているに違いない。その人は助けを必要としている！ あなたは反射的に武器を構え、その声の方へ駆け出す。しかし、安心して武器を下ろし、歩みを緩めてもよい。何が起きたか分かるか？ 状況が変わったのだ。最近までどの焚き火の周りでも歌っていたあの男が、もう自分は上手に歌えなくなったと知ったのだ。以前は誰もが彼の歌を聴きたがり、彼は多くの焚き火の場で歌い、そのおかげで優越感に浸っていた。しかし今、歌が上手なのは別の人だ。だから当然、皆はその別の人を歌を聴きたがる。彼のスタイルは少し独特かもしれないが、常に並外れた歌唱力を示しており、キャンプファイヤーとは彼にチャンスを与えるための場なのだ。

命の水

時折、皆さんのキャンプでも、他のキャンプに住む人々が本当に皆さんの神経を逆なですることがありました。例えば、ある少女を誘拐しようとしたり、その少女が自分たちの首領の目に留まったからだと主張したりするのです。しかし、その少女は以前から、誰かに誘拐されるくらいなら近くの川で溺死する方がましだと公言していました。もちろん、これは実際には溺れるつもりは全くなく、誘拐されること自体に反対しているわけでもなく、単に他の誰かに誘拐されたがっているだけだということの意味する。そんな少女が何を考えているのか、それを解き明かすためにシャーマンのところへ行く必要など全くない。尋ねてみれば、どの女性もそう教えてくれるだろう。何しろ、どの女性もかつては少女だったのだから。敵対する集落の首長は、狩りを計画する代わりに、あなたの集落からその少女を誘拐するのが最も手っ取り早いと考えがちだ。なぜなら、彼は彼女なしでは生きていけないからだ。彼らのシャーマンは、彼に薬草を飲ませる代わりに、時には手を振って何もしないことがある。彼らの首長が、その少女がいなくてもまだずっと長く生き延びられることを、彼はよく知っているにもかかわらず。そこで、ある朝、彼らのキャンプの狩人たちが皆、あなたのキャンプの近くに現れるだろう。しかし、彼らの首長は、慣例通り、その少女が花を摘みに行く気になり、約束の場所に現れるのを待つ代わりに、全く異なる行動に出るだろう。彼は狩人たちに様々な命令を下し、その結果、両陣営の関係は悪化することになる。あなたの陣営の狩人たちは皆、共同の食事への招待など全く知らないこと、そしてあちらの連中は立ち去ったほうが賢明であることを、相手に悟らせようとするだろう。一方、相手側は、招待状がないことなど全く問題ではないと示そうとするだろう。彼らは細かいことを気にしないから、ただ首領のために娘を連れ去り、すぐに立ち去るだけだと。

気づいているかどうかわからないが、君たちの武器は主に狩猟用ではあるものの、こうした状況でも十分に使える。そして、部族間のこうした争いの原因は、いつだって、本当にいつだって、ある一人の女にある。つまり、旧石器時代を通じてずっとそうだったのだ。新石器時代ではどうなるのか、きっと気になっているだろう。状況は劇的に変わる。捕まえない鳥ならどれでも、同じ罠に難なく引っかかることは、君たちもよく知っているだろう。これは、ウサギからマンモスに至るまで、あらゆる種類の動物を捕らえる罠すべてに当てはまる。魚はいつも同じ方法で捕まえるのに、それでも魚は相変わらずその罠にかかる。最も危険な獣さえも殺せるあなたの武器でさえ、基本的にはずっと同じものだ。それはあなたにとって当然のことだろう。だって、うまくいっているものを変える必要なんてないだろう？しかし、新石器時代には、それを満たすために並外れた創意工夫を必要とするニーズが現れる。狩りにはあまり向かない武器が登場するだろうが、そもそもその武器の目的は狩りではない。それは人間を殺すための武器だ。新石器時代の首長が、そんな武器を装備した手下た

ちを派遣して、自分のために少女をさらわせるとでも思っているのか？ 少女の話ではない。新石器時代において、少女や女性は二次的な存在となるだろう。とはいえ、よく考えてみれば、あなたたちにとって彼女たちは、あなたがたが持つ最も貴重なものである。あなたたちは常に彼女たちの元へと戻ってくる。あなたたちは、たとえ自らの命を犠牲にすることになっても、彼女たちの命を守る覚悟がある。通常、狩人は unnecessary 危険を冒そうとはしないものだが。なぜなら、彼女たちは単に子供たちの世話をし、産んだ赤ん坊に授乳し、歌を歌い、食事を用意し、動物の皮をきれいにし、それを衣服に作り変え、その他多くの仕事をこなすだけではないからだ。彼女たちはあなたを待っているのだ。

新石器時代のリーダーは、その重点を少し異なる場所に置く。新石器時代の首長は、近隣の集落をすべて地面に埋めてしまい、女たちを含め全員を根絶やしにし、彼らが持っていたものをすべて奪い、自分の貯蔵庫に持ち帰ることを、何よりも夢見るだろう。そのために、彼はできるだけ多くの特別な手下を雇い、彼らは一日中人を殺す術を訓練するだろう。もっとも、彼らは狩りなど全くできないのだが。彼は彼らを、肉を集める者たちよりもさらに手厚く養うだろう。なぜなら、彼らは彼らよりはるかに優れているからだ。その一方で、彼はこう愚痴るだろう。「自分は執拗な敵に囲まれている。奴らは、あなたのキャンプの全員を、自分さえも容赦なく切り刻み、あなたがたが持っていたものをすべて奪い、自分の食料庫に運び込むことしか考えていない」と。彼のあらゆる努力は、その特別な手下たちが、リスクを最小限に抑えつつ、あちらの連中を可能な限り効率的に殲滅し、さらに「より多くを殺せば殺すほど、自分たちがより優れている」と確信させることに注がれるだろう。武器は目まぐるしく変化し、これほど多くの種類の武器を考案できるとは、あなた方の誰一人として信じられないだろう。そして、そこに「奇跡の作り手」たちが現れる。

「奇跡の行者とは一体何者か」と、君たちは尋ねるだろう。ある新石器時代の奇跡の行者の物語を話そう。ある日、新石器時代の首長のもとに奇跡の行者が現れ、生命の水の秘密を習得したと告げる。その秘密は首長の期待にぴったりだった。なぜなら、適切に調合された「生命の水」を側近たち一人ひとりに丁寧に振りかけるだけで、その水をかぶった者は死ぬことができなくなるからだ。これにより、首長は「公共の利益」のための任務を遂行するのが格段に楽になる。なぜなら、その首長の側近たちは、たとえ命がけて頑張ったとしても、首長に何の危害も加えられなくなるからだ。新石器時代の首長は、奇跡を起こす者に背中をポンポンと叩いて励まし、十分な食事と適切な衣服を提供することさえあるだろう。そうすれば、間もなくその者は「生命の水」のことで頭がいっぱいになり、新石器時代の首長の側近たちを次の遠征に送り出す前に、「生命の水」を調製して彼らに振りかけることしかしなくなるだろう。これは素晴らしい仕事ではあるが、奇跡の行者は、同じ場所にあまり長く留まらない方が賢明だ。なぜか？ すぐに説明しよう。新石器時代の首長の部下たちが、も

う一人の新石器時代の首長の部下たちにボコボコにされ、自分たちが相手を全滅させるはずだったのに、逆に全滅させられる前に撤退したほうがいと、自発的に決断する場面を想像してみてください。もしかすると、彼らは「誰かを首長のもとへ送り、この『命の水』が本来あるべきように機能していないのではないか」と伝えるべきだと考えるかもしれません。遅かれ早かれ、新石器時代の首長はその失敗を知り、『命の水』の奇跡の作り手を呼び出し、自身の疑念をぶつけることになるでしょう。奇跡の行者は間違いなく、自分は誤解されたのだ、それは単なる思考の省略だったのだと弁明するだろう。なぜなら、「命の水」を振りかけられた手下は、たとえ殺されたとしても、しばらくすれば蘇り、再び殺戮を続けることができるからだ。誰かが死ねないのか、それとも殺されても（結局は死ぬが）すぐに復活するのか、必要なものを振りかけられたからという違いに過ぎないのだから。首長は当然、その説明に感謝し、奇跡の行者が技術的な詳細で自分の頭を悩ませなかったことを高く評価していると付け加えるかもしれない。そして、奇跡の行者にある実験への参加を提案するだろう。その実験において、奇跡の行者に求められるのは、一定量の「命の水」を準備することだけである。実験終了後、奇跡の行者は自由の身となり、例えば自分の居場所に戻って休んだり、焚き火の集まりに参加したり、その他何でも好きなことをすることができる。その選択はすべて彼に委ねられる。奇跡の行者は、自分の唯一の夢は、生涯を通じて「命の水」の秘密の知識をもって首長に仕えることだと述べるだろう。首長は間違いなく、それを大変喜ばしく思うと述べ、この実験こそがまさにその期待に応えるものであると告げるだろう。一定量の「生命の水」を調製した後、奇跡の行者は、首長のために他に何かできることはないかと尋ねる。そのような必要はないと告げられるが、それでも首長は実験の今後の流れを彼に説明する。さて、奇跡の行者の頭部は、この技に熟達した首長の助手たちによって、可能な限り丁寧に胴体から切り離されることになる。その後、新石器時代の首長である彼自身が、奇跡の行者の頭部と、その者が調製した「生命の水」で満たされた胴体の両方に、たっぷりその水を注ぐだろう。そうすれば、奇跡の行者は当然のことながら蘇り、好きな場所へ行くことができるようになる。奇跡を起こす者は、間違いなく、自分が誤解されたことを説明したいという切実な衝動に駆られ、実験に対する自身の見解を伝えるために懸命に努力し、そもそも「命の水」に対して、ほんの少し前まで抱いていたような信頼を、もはや抱いていないかのような印象を与え始めるだろう。これは皆さんには奇妙に思えるかもしれない。だって、彼の立場なら誰でも、念のため少なくとも二度、自らに「命の水」を浴びせるだろうから。彼ほど行動力のある人物なら、おそらく毎日「生命の水」を浴びていたはずであり、恐れることは何もないはずだ。しかし、彼の試みは首長の側近たちによって阻止されるだろう。彼らは確かに奇跡を起こす者ではなく、「生命の水」の秘密も知らないが、自分の仕事には精通しているのだ。どの陣営も、結局のところ、自分の仕事を知り尽くした者たちによって支えられているのだ。したがって、奇跡を行う者の首が胴体から切り離される

と、首領はそこに「命の水」を注ぎ、おそらく一瞬も待つことなく、手下たちに命じて、奇跡を行う者の残骸を別の場所へ運び、そこで蘇生させるだろう。

わが子らよ

おそらく皆さんは、新石器時代の人々が、旧石器時代の人々である皆さんのことを、かなり漠然としか理解していないだろうという印象をお持ちかもしれません。しかし、意外なことに、彼らは旧石器時代の人々について、かなり多くのことを知っていたのです。もちろん、以前お話ししたような、新石器時代の焚き火を囲んで虫を食べる話などは、非常に人気があるでしょう。しかし、それはあくまで焚き火の場での娯楽として語られる、彼らの想像のエンターテインメント版に過ぎません。実のところ、それは同じ物語の繰り返しで、変わるのは虫の種類だけなのです。同じ虫を二度も飲み込むのは難しいですし、それに、飲み込む人も時々変わるからです。おかげで、新石器時代の人々は皆、たとえ焚き火の周りに座っているだけで何もしない人であっても、焚き火のプログラムが驚くほど多様だと感じるようになるでしょう。お分かりだろう、新石器時代の人々にとって、焚き火の世界は時に彼らの世界のすべてとなるのだ。しかし実際には、旧石器時代が新石器時代の人々に、ある種の神秘的な魅力を呼び起こすことになる。旧石器時代のみを専門とし、旧石器時代を熟知していることだけで生計を立てている新石器時代のシャーマンの物語の一節を聞いてほしい。

旧石器時代の人間は、近隣の集落の住民を虐殺するのに極めて有効な、新石器時代の近代的な武器を所有していなかった。そのため、彼らの武器は狩猟にのみ使用され、隣人が狩った獲物を奪う代わりに、各旧石器時代の集落は独自に狩猟を行っていた。旧石器時代の人間の唯一の食料源は狩猟や漁労、あるいは採集であったため、植物や果実、キノコを採集するための特別許可、漁労のための特別許可、ましてや狩猟のための特別許可といった、これほど優れた解決策を考案することはできなかった。こうした課題に対処できたのは、あらゆるものに特別な許可証を導入した新石器時代になってからだった。旧石器時代の人間は、自分の食料庫を守るためにオオカミを飼いならすことさえできなかった。そのため、食料を共同の食料庫に保管せざるを得なかった。オオカミの飼いならし、すなわち新石器時代のオオカミの誕生は、進歩に向けた素晴らしい一歩であった。本物の、つまり野生のオオカミは、確かに遥かに効果的に噛みつき、単独でヘラジカを仕留めることができる。言うまでもなく、他の野生のオオカミと協力して狩りを行うことができ、必要とあればオオカミの群れはクマに立ち向かうことさえできる。一匹の野生のオオカミなら、家畜化された新石器時代のオオカミが何匹いようとも、何の問題もなく次々と噛み殺して片付けてしまうだろう。とはいえ、野生のオオカミは新石器時代のオオカミより劣っている。なぜなら、例えば隣人を襲わせるために使いこなすことはできないからだ。野生のオオカミは、単に役に立たない存在だ。なぜなら、その行く手を阻む者なら誰であれ噛み殺してしまうからだ。彼にとって、人間はすべて肉であり、その肉——優れた人間であれ劣った人間であれ——は、彼にとって

同じ味に過ぎない。だからこそ、私たちは家畜化されていないオオカミを「野生」と呼ぶのだ。

これらの興味深い観察は、新石器時代の他の多くのシャーマンたちによって展開されていくことになる。彼らは、初期の新石器時代の人々が、単に旧石器時代の首長たちを新石器時代の首長になるよう強いたのだと主張する。そのような首長は、現状に満足していると主張し、必死に抵抗した。彼が折れたのは、長々と語られる、賢明に聞こえる説得の末のことだった。周囲の者たちは皆、彼の頑なな態度を和らげてくれるよう懇願した。彼らは、新石器時代の首長の支配なしではもう耐えられないと訴えた。それまでは何とか、しかもかなり長い間、耐えてきたというのに。ついに首長は手を振り、圧力に屈して譲歩すると宣言し、今度は新石器時代の首長としての「首飾り授与式」を執り行う。これは、ご存知の通り、彼の肉親の運命にも少なからず影響を及ぼすことになる。首長はまもなく、新石器時代特有の様々な革新的なプロジェクトを精力的に推進し始めるだろう。

新石器時代のシャーマンたちが旧石器時代について知っていることは、洞窟の壁画を鑑賞したことから得たものだと思うかもしれない。しかし、そうではない。壁画からも確かに得ているが、他の情報源からも得ているのだ。あちこちに、まだ小さな狩猟採集民の集団が残っている。新石器時代の人々は、彼らに魚を捕ったり、さらには狩りをしたりする許可を寛大に与えます。もっとも、彼らは太古の昔からそうしてきたのですが。時折、新石器時代のシャーマン、つまり旧石器時代の専門家が彼らのキャンプにやって来て、様々な奇妙な質問を投げかけます。時には、別の新石器時代のシャーマンがやってくることもあるが、彼は何の質問もしない。そして彼は、狩猟採集民たちに向けて奇妙な演説を繰り広げるのだ：

わが子たちよ！ 君たちは決して劣っているわけではない！ 決して、決して！ 私は君たちを劣っているとは考えていない！ 私のような者が「君たちは劣っていない」と言っているのに、どうして劣っていると言えるだろうか！ 私は君たちのためにこれほどまでに親切なのだ！ 私を自分の父親だと思ってほしい！ 私は君たちのためにわざわざここへ来たのだ、わが子たちよ！ きっと、あなた方一人ひとりが、もっと良くなりたいと思っているはずだ！ 決して、あなた方が劣っているわけではない。そんなことは決してない。だが、あなた方一人ひとりが、もっと良くなることができるのだ！ あなた方一人ひとりが、もっと良くなりたいと願わなければならない！ それはとても簡単なことだ。まず、あなた方一人ひとりに、決して裏切らない「命の水」を注ぐ。それから、あなた方に新しい名前を授ける、わが子たちよ。その新しい名前は、より良いものになるだろう！ 昔の名前は忘れていい。できれば、すべてを忘れてほしい。私が暗記したことはすべて暗記し、私が信じていることはすべて信じなければならない。新しい歌を教える！ もっと素晴らしい歌を！ これらすべては、あなたたちの父である私が、あなたたちのためにしているのだ、わが子らよ！ それによってあなたたちは

より良くなるだろう。しかし、私があなたたちに暗記させるであろう様々な新しいタブーを破ったことについて、私に説明する必要がなくなるほどには、まだ十分ではないのだ、わが子らよ!

旧石器時代の人々のうち、少なからずはその後、自分の母親のところへ行き、この男のことを覚えていないかと尋ねるだろう。なぜなら、彼はあの子供たちのことを延々と語り、どうしても自分を「父」と呼ぶように求めてくるからだ。しかし、肝心なのはそこではない。新石器時代の人々は、あなた方旧石器時代の人々について、多くのことを知っているだろう。ただ、あなた方のように考えることはできない。だからこそ、彼らは単に、あなた方も新石器時代の人々と同じように考えていたが、何も成し遂げることができなかったのだと考えるしかないのだ。誰を嚙んではいけないか見分けがつかない狼を、彼らがどう呼ぶか覚えているか? 彼らは、そんな狼は「野生の狼」だと言うだろう。君たちもまた、野生の存在なのだ。

新石器時代の人間は、旧石器時代のことしか扱わない特別なシャーマンを持っているのだから、新石器時代そのものを手のひらで転がせるだろう、とあなたは思うかもしれない。しかし、そうではない。新石器時代の人間は、魚が「水」というものの存在を知らないのと同じように、新石器時代について何も知らないだろう。私のような指南書は、どんな新石器時代の焚き火の周りでも紹介されることはないだろう! なぜだ? それはもちろん、全く面白くないし、ところどころで単に嘘をついているに違いないからだ!

オオカミの声

新石器時代にも、あなたたちのような旧石器時代の人々がまだ生き残っているのだから、新石器時代の人々は、あなたがたが想像していたほど恐ろしい存在ではない、とあなたは思うだろう。彼らが先史時代の人々を放っておくという、何よりの証拠だ。せいぜい、彼らに何かを振りかけたり、暗記させたりする程度だろう。私はあなたたちを騙してはいない。しかし、真実のすべてを話したわけでもない。新石器時代の間は、あなたがたが理解するような意味で、非常に善良な人間になり得る。しかし、恐ろしい人間にもなり得る。あなたがたも、すべての動物を同じ方法で狩るわけではない。なぜなら、どの動物にもそれぞれの習性があるからだ。マンモスに、ウサギを捕まえるような罠を仕掛ける者などいない。クマとヘラジカでは、狩りの仕方も異なる。ヘラジカとシカでさえ、狩りの仕方は異なる。なぜなら、ヘラジカは単独で生活し、シカは群れで生活するからだ。これは皆さんもよくご存知だろう。新石器時代の間は、私が示そうとしたように、実に様々な振る舞いをする。しかし、誰かを放っておくことはできない。他の人間を見かけたら、まず最初に、相手が何を持っているかを判断しようとする。人間とはそういうものであり、たとえ望んだとしても、それについてどうすることもできないのだ。彼が、自分にはない何かを持っている旧石器時代の人々と遭遇したと想像してみてください。例えば、新石器時代のキャンプ地に最適な土地を持っているとします。広大な土地、森や平原、川や湖に満ちた広大な空間。太古の昔から彼らの祖先が狩りをしてきた動物たちが、数多く生息する土地だ。彼は、彼らの方が自分より優れていると思うだろうか？ 彼らの土地が、彼の頭を離れることはないだろう。そのことを考えずにはいられなくなる。彼らとその土地を所有し、自分にはないというのは不公平に思えるだろう。旧石器時代の人々が自分と土地を分け合うのが公平だ。そして最も公平なのは、彼らとその土地のすべてを、まさにこの新石器時代の間である自分に贈ることだ。ここで、ある物語を紹介しよう。以前、真実をすべて話さなかったことへの償いとして、これを皆さんにお話ししなければなりません。この物語が本当なのか、と尋ねるでしょう。はい。本当です。これは必ず起こるのです。

想像してみてください。新石器時代の人々が、これまで知らなかった土地を見つけ、そこにあなた方、旧石器時代の人々のような人々が住んでいると気づくのです。旧石器時代の人々の集落には、時折、「旧石器時代の人々の友人」が現れ始めます。「それは一体誰なのか」と、あなたは尋ねるでしょう。旧石器時代の人々の「友人」とは、その土地には全く関心がなく、ただ旧石器時代の人々をもっとよく知りたいと願う新石器時代の人です。彼らの習慣についてもっと知りたいのです。彼はただ、彼らの集落で一緒に暮らさせてほしいと頼むだけでしょう。たとえ周囲に広大な空き地があったとしても！ たとえ、どの旧石器時代の人々の集落からも何日も離れた場所に、小屋を建てられるだけの十分な場所があったとし

ても。それでも彼は、まさに彼らと一緒に暮らしたいという抑えきれない衝動を感じるだろう。しかし、やがて「旧石器時代の人々の友人」の寝床が空になり、あっという間に冷たくなってしまう日が来る。彼に与えられた避難所は不要になる。彼と分かち合っていた食事は、もはや美味しく感じられなくなる。彼らは驚き、おそらく彼のことを心配するだろう。何か悪いことが起きたのではないか、あるいは彼に助けが必要なのではないかと考えるかもしれない。しかし、もし彼らの誰かが猛禽類であったなら、彼を見つけるためにさらに高く舞い上がることができただろう。彼は粘り強く、最も近い新石器時代の人々の集落へと向かって進む。そこにたどり着くと、彼は自分を受け入れてくれた人々の集落について語るだろう。その話は奇妙なものになる。彼らの習慣や服装、あるいは食べ物についての描写は一切ない。その代わりに、彼らが何人いるか、どんな武器を持っているかを語るだろう。そして、彼らを「野蛮人」という言葉で表現するだろう。

なぜなら、彼らはまさに野蛮人だからだ。新石器時代の人々のこの野营地全体は、人を殺すための最高の武器を装備した首長の部下たちで埋め尽くされるだろう。首長の側近たちは、まるで新石器時代の狼のように、主人の命じることは何でも実行するだろう。まず彼らは野蛮人の集落を見つけ出し、野蛮人の女性と子供たちを一人残らず皆殺しにする。そして、もはや狩りができない野蛮人の老人たちも皆殺しにするだろう。数的な優位と新石器時代の武器を駆使して、集落を守ろうとする野蛮人の男たちを皆殺しにし、さらに、もはや帰る場所がないと悟って彼らを復讐しようとする者たちまでも皆殺しにするだろう。しかし、彼らはそれでもなお、野生の男たちに対して奇妙な魅力を感じ、その感情を、軽蔑を表す侮辱的な身振りで隠さなければならないだろう。自分たちが優れているという事実を。彼らにとって、その野生の者たちは、たとえ武器を持っていなくとも、生きている限り、極めて危険で、予測不能かつ不可解な存在として扱われるだろう。彼らは、殺した野生の者たち——野生の赤ん坊さえも——を、何の躊躇もなく忘れるだろう。しかし、もし彼らが人生で、たった一人の野人が、自分のキャンプを守ろうとする時、あるいは単に復讐しようとする時に発する叫び声を耳にすることになれば、彼らはすべてを思い出し、口を閉ざさざるを得なくなるだろう。その声は、彼らの耳には、新石器時代の狼たちの耳に響く野生の狼の遠吠えのように聞こえるだろう。それは恐ろしい声となるだろう。そこには、彼らが直感的に感じ取り、恐怖を呼び起こす何かがある。しかし、彼らはもはやそれを名付けることも、理解することさえできないのだ。

共通の言語

どのキャンプにも、実は独自の言語がある。時折出会う「他者」たちでさえ、似たような話し方をすることもあるが、時にあなたたちとは異なる独自の表現を使うことがある。それらの表現は奇妙に聞こえるかもしれないし、時には滑稽にさえ聞こえるかもしれない。あなたたちなら、そうは言わないだろう。逆に、あなたの言語も彼らには少し奇妙に聞こえるかもしれない。時には、双方が同じ言葉を使っても、その意味が異なっていることもある。時には、全く意思疎通ができない旧石器時代の人々に会うこともあるでしょう。そのような人々には少し食べ物を差し上げると、彼らも自分たちの食べ物をあなたにくれるでしょう。そうして初めて、彼らがあなたたちと同じ旧石器時代の人々だと分かるのです。たとえば彼らの言うことが一言も理解できなくても。新石器時代には、意思疎通を著しく容易にするいくつかの解決策が導入される。その一つが「共通語」だ。「それは一体何なのか」とあなたは尋ねるだろう。二つの新石器時代の集落を想像してみしてほしい。それらを区別するために、一方を「良い集落」、もう一方を「悪い集落」と呼ぶことにしよう。良い集落も悪い集落も、新石器時代の首長たちが統治している。互いに相手を「友人」や「兄弟」と呼び合うでしょう。また、合意に達すること、つまり「共通言語」を見つけられることを願うでしょう。彼らは基本的に同じことを話しているように見えます。ただ、それぞれの頭の中では全く異なることを考えているのです。

その違いを説明する前に、まず言語の問題とはかなりかけ離れているように思えることについてお話ししたい。それは、魚についてだ。さて、釣りの禁止を最も喜んでいるのは誰だろうか？ 一見すると、魚のように思える。魚は釣られたくもなければ、食べられたくもないし、そもそも水から引き上げられたり、誰かの食料庫に収められたりすることなど望んでいない。しかし、釣りを禁止するのは決して魚ではありません！ それを何らかの形で導入するのは、新石器時代の首長なのです！ もちろん、彼は「公共の利益」のためにそうするでしょう。なぜなら、もしこの禁止令がなければ、新石器時代の人々はすべての魚を釣り上げて食べてしまい、その結果、平らな世界全体が永遠にこれらの美味しい生き物を失ってしまうことになるからです。注目すべきは、新石器時代の首長が課す禁止令は、あくまで人間にのみ適用されるということだ！ 彼は決して、「魚を捕まえているところを見つかったクマは、すべて厳しく罰せられる！」などとは言わないだろう。クマは魚を捕まえるのが大好きだし、しかもかなり上手だ。彼らは禁止令に従うはずがないが、新石器時代の首長は、魚を1匹でも捕まえたクマをすべて撃つよう命じることで、実際にその禁止令を施行することはできたはずだ。しかし、そのような禁止令が導入されることは決してない。なぜなら、その目的は決して魚を保護することではないからだ。この禁止令は人間、そして人間だけを対象

としている。どんなに奇妙に聞こえようとも、この禁止令の目的は、劣った者たちを飢えさせることにあるのだ。

ここで「共通言語」という概念に戻ります。新石器時代の首長は、実のところ、あの「悪」の陣営の連中を皆殺しにして、彼らの所有物をすべて奪い取ることに全く関心はありません。あちらの連中を飢えさせることさえできれば、彼は満足するでしょう。まさにそこに、「共通言語」という概念の役割があるのです。善良な新石器時代の首長は、共通語は自分の言語であるべきだと考えている。なぜなら、その言語もまた善良だからだ。さらに言えば、彼の言語の方が優れているのだ！問題は、邪悪な新石器時代の首長が逆に、自分こそが善良であり、自分の言語の方が共通語としてずっと適していると考えている点にある。したがって、両者は同じことを言い、実際にはどちらが本当に「善」で、どちらが「悪」なのかを確かめる術は全くない。両首長は定期的に、武装した手下たちを互いに送り込むだろう。時折、一方が相手の手下を皆殺しにできることもあるが、キャンプの他の住民までは決して皆殺しにはできない。すると、向こう側に新たな新石器時代の首長が現れるだろう。彼は首長の首飾りを身につけ、自分の手下やシャーマン、そして肉を集める者たちを任命する。ただ、彼自身を含むすべての手下たちは、勝者たちの言語を話すことになる。これこそが「共通言語」となるのだ。この共通語で表現されるあらゆる思考は、極めて賢明であり、敗者の言語やその他のいかなる言語で表現された同一の思考よりもはるかに賢明である。なぜなら、共通語はより優れた言語だからだ。勝者が生かしておく敗者の誰もが、この言語こそが最良であることを学ばなければならない。両方の首長、すなわち勝者の首長と敗者の新たな首長は、それ以外では実際には非常に似通って見えるだろう。両者とも首長の首飾りを身につけ、嚴重に警備された自分専用の貯蔵庫に肉を蓄える。彼らは似たようなことを語り、似たような命令を下すだろう。もちろん、共通語で。互いに似たような称号を名乗るだろう。彼らは同じ大いなる精霊を信じ、彼らのシャーマンたちはその大いなる精霊について全く同じ物語を語るだろう。もちろん、その多くは共通語で。彼らを見分ける方法はただ一つだけだ。それは、勝利者の首長は決して自分の命令を正当化しないということだ！なぜなら、真の首長は決して自分の命令を正当化しないからだ。単に、そうする必要がないのだ。「大衆の利益」や「大いなる精霊の意志」というだけで、すでに十分だからだ。一方、敗者のこの新しい首長は、自分の命令の一つひとつを正当化するだろう！そして、その正当化の理由は、極めて説得力のあるものになるだろう！命令が奇妙であればあるほど、その説明は長くなり、賢明で、説得力のあるものになる、と言っても過言ではない！それらの説明は、誰もが利用できる様々な観察事実に基づいていよう。極めて的を射た響きを帯び、それを理解するために「共通言語」の知識など全く必要とされないだろう。これが、両指揮官の間で唯一目に見える違いとなる。確かにもう一つの違いはあるが、傍観者にとっては事実上気づかないほどだ。すなわち、両陣営の間では、物資と情報の活発な交換が行われることになる。た

だし、物資、つまり食料は勝利者の陣営へと運ばれ、一方、敗者たちには情報の流れが注ぎ込まれることになる。その情報の一部は、多くの最重要側近たちの前で、もちろん共通語を用いて、敗者たちの新たな首長に伝えられるだろう。そのメッセージの中で、勝利者の首長は、敗者の新しい首長を「友」と呼ぶだろう。しかし、特徴的なことに、決して彼を「兄弟」とは呼ばない！ それは敗者の新首長に誤解される恐れがあり、もしかすると、その後、敗者の新首長の小屋を徹底的に換気しなければならないことになるかもしれないからだ。しかし、新首長の耳元で囁かれるメッセージもある！ そう、他の誰にも聞こえないように！ その首長だけの耳に届く、この謎めいたメッセージの内容が何なのか、知りたいだろうか？ 教えてやろう。それは、彼がまもなく下す命令の内容であり、また、まもなく形成されるであろう様々な事柄に対する彼の意見だ。特徴的なのは、何の根拠も示されないということだ。根拠など、それは彼の問題なのだ。

両首長が「共通言語」を見出したことの直接的な帰結として、敗者の陣営ではほぼ全員が飢えることになるだろう。優れた者たちでさえ食糧に困るだろうし、劣った者たちについては言うまでもない。その代わり、誰もが自分の首長の戦略について極めて詳しく知ることになるだろう。彼の命令に対する長くて賢明な根拠を知り、また様々なテーマに関する彼の意見も熟知することになる。これこそが新石器時代の特徴的な側面である。新石器時代の敗者は、常に自分たちがすべてを完全に理解していると思込み、まもなく周囲のすべての人々に「共通言語」を押し付けることができると信じている。

子守唄

ご存知の通り、あなた方の女性は概して狩りをしない。それは、彼女たちが狩りができないということだろうか？ 実はその通りだ。必要とあれば彼女たちも狩りをするが、その点において男性に匹敵することはできない。どんな男性であれ、たとえ狩りができなくても、その体内には、男性であり、狩りを主な生業としていた数え切れないほどの先祖たちの記憶が宿っている。男性は生まれながらの狩人である。なぜなら、その男性の先祖たちは皆、あるいはほぼ全員が狩人だったからだ。その先祖たちは皆、成人まで生き延び、それぞれ少なくとも一人の子供をもうけたに違いない。そして、もしその子が男の子として生まれたなら、不思議なことに、先祖たちに起こったことを覚えているだろう。まるでその少年が、先祖たちの人生すべて、彼らが経験したあらゆる危険を、まるで自分の目を見たかのように覚えているかのように。とはいえ、そのほとんどを彼は全く知らないはずなのに。そして、もし子供が女の子として生まれたなら、その少女の中には、彼女の先祖であったすべての女性たちの記憶が呼び覚まされる。多くの父親は、なぜ自分の小さな娘がこれらすべてを知っているのか、誰が彼女に、自分には気づかないようなことに気づくよう教えたのか、なぜ彼女は自分よりも、他人の声のトーンや視線の意味をよく理解しているのか、と不思議に思うだろう。

女性は時として、動物であれ悪人であれ、自分の子供を守らなければならないことがある。そして、子供を守る女性ほど恐ろしい敵はいない。しかし、女性は決して狩人になることはないだろう。彼女は彼のような考え方をすることはできない。彼女の役割は、単に異なるのだ。あなたがたは、マンモスを狩るために女性を連れて行くようなことはしないだろう。あなた方なら誰でも、反射的に「彼女に何事も起きないように」と考え、ある意味で彼女を守ろうとするだろう。そして、ご存じの通り、狩りにおいてはただ一つの目標しか持たない。だからこそ、女性はマンモスを狩らないのだ。

しかし、新石器時代の人間は、女性こそがマンモスを狩るべきだという素晴らしいアイデアを思いつく。それをどう正当化するのか？ とても簡単だ！ 彼がいつも使っている言葉を使うのだ。「彼女は決して劣っていない！」と言うのだ。では、父親はどうするだろうか？ 新石器時代において、父親の方が劣ることになるが、それを口に出すわけにはいかない。新石器時代の父親は、この平らな世界全体で最も惨めな存在となるだろう。彼の役割の意味は根底から覆される。なぜなら、特別な許可なしに狩りや漁をすることは許されなくなるからだ——たとえ自分の子供たちを養うためであっても。もし誰かが彼の子供や妻を傷つけたとしても、いかなる場合でも彼らを守ることは許されない。そして、もし誰かが彼らを殺したとしても、彼は復讐することは許されない。彼は存在はするだろうが、実際には存在しないも同然だ。もはや、あなたがたが「父」と呼ぶような存在ではなくなる。父という存

在が一体何のためにあるのか、誰も分からなくなるだろう。彼には、家族に食料と安全を保障する手段がただ一つしかない。従順でなければならないのだ。服従こそが、新石器時代の人間の最大の美德である。新石器時代の首長の側近たちは、たとえ何の能力も持たない者であっても、絶えず彼への服従を誓い続けるだろう。そして新石器時代の首長は、まさにそれを彼らに期待するだろう。何しろ、首長は自分が彼らに与えたすべての称号が、彼らの能力とは何の関係もないことを知っているからだ。なぜなら彼らも、首長自身と同じように、何もできないのだから。しかし重要なのは、彼らが従順であることだ。首長への不服従は最大のタブーとなる。不服従を示した者は、首長の側近たちが、沼地に逃げ込もうとする傷ついたヘラジカのように、彼を追い詰め、殺し尽くすまで決して諦めないことを覚悟しなければならない。

よく考えてみれば、新石器時代の首長の権力の源泉は、決して手下の武器などではない。実のところ、それは彼らが語る物語でもなく、その物語を信じないことは許されない。権力は恐怖から生まれる。新石器時代の場合、それは飢餓への恐怖である。飢えは「劣った者」の運命となるが、実のところそれは新石器時代の首長の手握られた武器であり、誰もが恐れるような武器なのだ。「劣った者」が飢えなければならないのは、まさに「優れた者」たちが「劣った者」になることを恐れるようにするためである。もし「劣った者」が飢えていなければ、首長は「優れた者」たちに対しても権力を持ってないだろう。なぜなら、彼らには恐れるべきものがなくなるからだ。新石器時代の首長は、最も有能な側近たちの背中を叩きながら、彼らの目に十分な恐怖が宿っているか、十分に服従しているか、そして自分が彼らの命の綱を握っていることを十分に理解しているかを、注意深く確認するだろう。女性たちはこれを真っ先に理解するだろう。だからこそ、新石器時代においては、男性よりも女性の方が信頼されることになる。同じ理由で、新石器時代の人間にとって、女性はあなた方一人ひとりが考えるほど貴重な存在ではない。全くもってそうではない。新石器時代の人間は、女性をあなたたちよりもはるかにひどく扱うだろう。なぜなら、彼らが女性を恐れていないからだ。どんなに従順な男性であっても、たとえ狩りができなくても、誰もが狩人の心を持っている。男たちはリスクを冒すことを知っている。新石器時代において禁じられた自由の味を、たとえ一瞬でも味わうために、自らの命を賭けることさえ厭わない者が少なくない。武器だけでなく、手にした石さえも、首長には自分に対する絶対的な権力などないと思わせるのだ。男たちには、たとえ成功の確率が低くとも、あるいは皆無であっても、リスクを冒すという奇妙な能力がある。そのため、新石器時代の首長にとって、女性たちが自分たちと同じ男であり、それどころかそれ以上に優れていることを証明することほど、何よりも重要なものはないだろう。

乳児にとって母親の声が何を意味するか、あなた方もよくご存知だろう。まだ言葉は理解できないが、母親の声を認識しているのだ。もし父親が乳児に子守唄を歌おうものなら、乳児はハリネズミのように身構え、その奇妙な歌声をしばらくの間は聞いているかもしれない。たとえ父親が精一杯優しく歌おうと努力したとしても、遅かれ早かれ、赤ちゃんは善意だけでは不十分であることを彼に悟らせるだろう。ネオリタの赤ちゃんたちは、あなたたちの赤ちゃんたちと全く同じであり、何が好きになるべきかまだ理解していない。

支持者

新石器時代を通じて、劣った者たちは優れた者たちを憎み、優れた者たちは劣った者たちを軽蔑し、実のところ彼らを恐れるだろう。また、自分たちが十分に従順でなければ、自分たちも劣った者になってしまうのではないかと恐れるだろう。劣った者たちには、優れた者たちを皆殺しにすれば、再び旧石器時代が戻ってくると思えるだろう。旧石器時代への回帰を夢見た、新石器時代の人々である二人の友人の物語を語ろう。そのうちのひとりには、実際にそれを成し遂げる者としての自分を想像していた。私は彼を少し変わった名前と呼ぶことにしよう——「帰還する者」と呼ぶことにする。もう一人は彼を信じ、帰還する者を助けるためなら何でもする覚悟でした。この物語におけるもう一人の男を、私は「支持者」と呼ぶことにします。たいていの場合、「帰還する者」もその支持者たちも、新石器時代の首長に捕らえられ、厳しく罰せられることになるでしょう。しかし、成功する者たちもいます。ごく、ごく稀なケースでは、彼らは実際に何かを変える機会を得るだろう。彼らは青春の夢と、二人で交わした長い会話を覚えているだろう。計画。なぜなら、この平らな世界において、若者の計画ほど、これほど強い力と、これほど予測可能な形で戻ってくるものはないからだ。若者の計画は、押し寄せる波のようだ。彼らの熱意と自信は、岩だらけの岸に打ち寄せる波の衝撃と同じくらい容赦がない。老いた時、彼らはかつての計画を覚えてはいないだろう。しかし、かつて何かを強く信じていたことは覚えているだろう。もし支持者が「帰還する者」の勝利に貢献すれば、彼はこの世で最も幸福な人間となるだろう。彼は、これからは誰も飢えることはなく、もはや「優れた者」など存在しなくなる、と信じるようになるだろう。彼の友人は、もし成功し、生き延びて新石器時代の首長を打倒すれば、もう飢えることはないという約束していた。友人が、その約束をどれほど信じているかがはっきりと伝わるような口調で語るなら、誰がそれを信じないだろうか。そして、あなたがたが疑っているようなことにはならない。「帰還する者」が新石器時代の首長を倒したとしても、その約束を破ることはない。彼は約束を守る。そのような約束は、常に守られるものだ。

山のように巨大なマンモスが、ついに地面に倒れる瞬間、あの感覚をご存じだろうか？ どんな狩人も、その感覚を忘れることはない。それは勝利の感覚であり、成し遂げられたことに喜びを感じるのだ。すぐにキャンプにたくさんの食料が揃うと思うと、嬉しくなる。このマンモスが、しばらくの間、仲間たちの生存を保証してくれるからだ。一部の者は残って、獲物を捕食者から守り、分配を始めるだろう。そして、一部の者はキャンプに戻り、成功したことを報告するのだ！ 女性や子供たち、そして老人たちまでもが、彼らを出迎えるだろう。言葉など必要ない。狩人の顔を一目見れば、今回こそ成功したことがわかるからだ！ それは彼の顔だけでなく、歩き方や声の調子からも見て取れるだろう。

勝利の瞬間は、誰にとっても甘美な味わいを伴うものだ。勝利とは、守り抜かなければならないものなのだ！ まるで、あなたがたが獲物を見つけた捕食者からマンモスを守るように。あなたがたは、その獲物から腐肉食動物を追い払う。ハゲワシたちに、自分たちの努力の成果を横取りさせることは決して許さないのだ。勝利は、新石器時代の人にとっても甘い味を持つ。もし彼がその勝利を守らなかったなら、マンモスを狩りながらも、その後、捕食者からそれを守らなかった者のようになってしまうだろう。彼のすべての努力は無駄になってしまう。彼が戦ったもの、自らの命と支持者たちの命を危険にさらしてまで守ろうとしたものが、他者の手に渡ってしまうかもしれない。彼はただ、その戦利品を守らなければならない。そして、彼の頭の中に計画が生まれる。ほら、新石器時代の人間は、このような状況では計画を持たなければならないのだ。その計画は間違いなく生まれる。実のところ、それは彼の頭の中に常にあったものであり、新石器時代の人間はただ突然それに気づくだけだ。その計画は常に彼の頭の中にあった。なぜなら、誰も自分が何者であるかから逃れることはできないからだ。新石器時代の人間は、常に新石器時代の人間として考えるだろう。彼は別の考え方をすることができない。彼の支持者は、奇妙なことに気づくだろう。時折、彼は友人のもとを訪れ、いつになったら旧石器時代を導入するのかと尋ねるだろう。そして、旧石器時代を突然導入することは不可能だと知るだろう。それは非現実的な考えだ。それには時間が必要だ。少なくともしばらくの間は新石器時代を維持しなければならない。それは、すべての「より優れた者たち」を排除するまでの、あくまで一時的な解決策に過ぎない。そして、彼らを片付けた頃には、また別の目標が現れ、それもまた旧石器時代の導入を許さないだろう。その次はさらに別の目標が。覚えておいてほしい、新石器時代の暫定的な状態ほど永続的なものはないのだ。支持者は友人に、旧石器時代のこと、彼らの若き日の計画、そして互いに交わした約束を思い出させるだろう。そして、友人に何が起きたのか理解できないだろう。何も起こらなかったわけではない。オオカミの子は愛らしく見える。それは人間に温かい感情を呼び起こし、その鳴き声は滑稽で、少し哀れに聞こえる。しかし、その子はやがてオオカミに成長する。すべてのオオカミはかつて子犬だったのだ。そして子狼も、十分に長く生き延びれば、狼へと変わる。子狼自身はまだそれを知らないが、それでもその中には、いつか必要とされた時、群れのリーダーの合図で子狼たちを守るために熊に襲いかかるために必要なすべてが、すでに備わっているのだ。オオカミたちは、クマが自分たちの何匹かを殺すかもしれないことをよく理解している。しかし、子犬たちを守ることは彼らの自然な本能であるため、彼らはためらうことなくそうするだろう。

新石器時代の人間は、本来悪い人間ではない。しかし、オオカミがオオカミでいられなくなるのと同じように、彼は新石器時代の人間であることをやめることはできない。だからこそ、「帰還する者」は、友人のためにできることはただ一つだけだ。ある日、新首長の側近たちが「支持者」の小屋を訪れる。その中には、新石器時代のシャーマンも含まれてい

る。そのシャーマンは、新しい首長が彼の健康を深く案じていると伝えるだろう。首長は、支持者が最近、同じことを繰り返し話していることに気づいていたのだ。彼は約束を忘れておらず、それを果たすために可能な限りのことをするつもりだ。そして、自ら来ることはできなかったが、彼、つまりシャーマンに、支持者のために薬草を用意するよう頼んだのだ。

罨

案内人は、遠くから新石器時代の人々の集落を見かけた。それは広大だった。彼はその方向へと向かった。新石器時代の人々は時折、彼のような案内人を雇い、狩りの指揮を任せることもあった。彼はその手腕を持っていた。ただ、今回は特別な任務だった。集落で、彼はその内容を告げられた。狩り、そう——すべてはいつもの通りだ。彼には狩猟隊が任せられ、武器も与えられる。しかし今回の任務は、単に狩りを指揮することではなかった。翌日、彼の担当する狩猟隊が紹介された。皆、ごく普通の旧石器時代の人間のような格好をしていた。彼らは穏やかに、彼の目を見つめていた。彼らが持っていたのは、マンモス狩りに使われるような普通の武器だった。しかし、ガイドはすでに、これが普通の狩りではないことを知っていた。前日、彼は事情を聞いていたのだ。彼の狩猟隊の中には、彼と同じような普通の旧石器時代の間人もいた。新石器時代の間人は、狩猟のために彼らを雇っていたのだ。しかし、他の狩猟隊員たちは旧石器時代の間ではなかった。彼らは新石器時代の間であり、その唯一の任務は、普通の旧石器時代の狩猟者をできるだけ忠実に模倣することだった。彼らは皆、旧石器時代の間のように見え、彼と同じように狩りができた。彼らの目には恐怖の色はなかった。しかし、彼らは旧石器時代の間ではなかった。ガイドは、そのような者たちの話をすでに聞いていた。それでも彼はその挑戦を受け入れ、今、自分の狩猟者たちのグループの前に立っていた。彼ら一人ひとり自分が誰であるかを知っているが、他の者については何も知らない、と彼は聞かされていた。また、誰にでも「あなたは誰ですか」と尋ねてよいが、その質問に対しては、いずれの場合も全く同じ答えが返ってくる、とも聞かされていた。「私はごく普通の旧石器時代の間だ」。ただ、それが常に真実であるとは限らない。したがって、ガイドは誰が誰なのかを知らず、また決して知ることはなかった。彼の任務は、狩りから戻った各狩人を、その狩人の成果のみに基づいて評価することだった。

狩りは計画通りに進んでいた。ある瞬間までは。後になって、獲物用の罨に誰かが手を加えたことが判明した。ただ、誰がやったのかは分からなかった。罨は、獲物の代わりに、すべての旧石器時代の間人がはまるように特別に改造されていたことが分かったのだ。真の旧石器時代の間ではない者たちは、彼らの命を犠牲にすることで、自分たちの命を救うことができた。そのうちの1人は、実際にそうした。彼は新石器時代の間であり、旧石器時代の狩人と同じように振る舞い、狩りをするよう特別に訓練されていたのだ。しかし、彼はガイドがこの狩りを生き延びることを望まなかった。なぜなら、ガイドが「自分は劣っていた」と告げる可能性があるからだ。罨は、狩りに参加する旧石器時代の人々が、必然的にその中に落ちるように改造されていた。欠けていたのはただ一つだけだった。決定的な瞬間に、ガイドは命令を下すはずだった。命令が実行されれば、状況は一変し、自力で身を守

るしかなくなるはずだった。しかし、ガイドは一言も発しなかった。もしかすると、この状況があまりにも順調すぎることを予感していたのかもしれない。あまりにも明白すぎる。まるで相手の隠された意図を見抜いたかのようだった。そして彼は命令を下さなかった。相手に自由に行動させる余地を残したのだ。これは旧石器時代の狩人にとっては当然のことである。なぜなら、狩りの最中に起こりうるあらゆる状況を予測することは不可能だからだ。一方、旧石器時代の人間を装うことだけが任務だったあの偽の狩人は、ガイドからの命令だけを必要としていた。彼はその命令を待ち、そうして旧石器時代の人々に起きたすべてのことはガイドのせいだったと後で言えるようにしていたのだ。しかし、命令は下されなかった。

エピローグ

皆さんが、私がここで紹介した新石器時代に関する知識をどこから得たのか、気になっていることでしょう。秘密をお教えしましょう。このガイドブックは、皆さんと同じような人間によって作成されたのです。彼は新石器時代らしい名前を持ち、狩りの術は知らず、釣りに誘われても一生に一度あるかないかといったところでしょう。彼を知るネオリトの人々は皆、心の中で「ネオリトの人間にしては、ちょっと変わっているな」と思っていることでしょう。彼は立派な男だから、誰もそれを口には出さないでしょうが、誰もが「もっと努力すべきだ」「もっと野心を持つべきだ」、つまり「できるだけ多くを手に入れ、それによってより良い人間になるべきだ」と考えているはずです。彼にとって、それは奇妙なことでしょう。それは、あなた方一人ひとりが奇妙に思われるのと同じことです。しかし、彼の新石器時代の名前を教えよう。彼の名はパヴェウ・ビエルナツキだった。

テスト

1. なぜ新石器時代の人間になりたいのですか？

a. 新石器時代の人間は、私の部族にとって役に立つかもしれない。

0点

b. 新石器時代の人間は、私にとって役に立つかもしれない。

1点

c. それで私に何の得があるの？

大量のポイント

ト

2. 誰かがウサギを2匹狩り、そのうちの1匹をあなたにプレゼントしたいと言っている。

a. 相手にも何かあげないといけない。

0点

b. 相手が気が変わる前に、そのウサギを持って逃げなければならない。

1点

c. もう1匹のウサギも彼からせしめなければならない。

大量のポイント

ト

3. 女の子を見るたびに、いつもバカになってしまう。

a. 明日彼女を誘拐すると言って、その後彼女を待つべきだ。

0点

b. 彼女の意思に関わらず、キャンプから連れ去らなければならない。

1点

c. 彼女の父親と話し合う必要がある。

大量のポイント

ト

4. 新石器時代の首長は何ができますか。

a. 何もできない。

0点

b. あることを知っているが、その反対のことを信じている。

1点

c. 公共の利益を守る。

大量のポイント

5. 誰が上手に歌えるか?

a. 歌声が美しい人。

0点

b. キャンプファイヤーで一度でも歌ったことがある人。

1点

c. 今、キャンプファイヤーで歌っている人。

大量のポイント

ト

6. 新石器時代のシャーマンから免除を受けるかどうかは、何にかかっているか。

a. 病気かどうか。

0点

b. 彼の食料庫から。

1点

c. 彼にどれだけの食べ物を届けるかによって。
ポイント

大量の

7. 「生命の水」は何に使うのか。

a. 近隣のキャンプを殲滅する際の防御を確保するため。

0点

b. 何らかの保護を確保するためだが、何から守られるのかは不明。

1点

c. 「命の水」をかけられた者は、誰かに殺されるとすぐに蘇る。ただし、奇跡を起こす者である場合は除く。

大量のポイント

8. なぜ新石器時代のオオカミは野生のオオカミより優れているのか？

a. 誰を噛んでいいか、誰を噛んではいけないかを知っているから。

0ポイント

b. だって、ただ単に優れているから！

1点

c. 食料庫の番ができるから。

大量のポイント

合計ポイント：

0点 - ネオライトについて何か問題があるようだ。残念ながら、内容を十分に理解できていない。

1~3点 - 素晴らしい！ 進歩しています！ このまま頑張ってください！

高得点 - この教科書はあなたには必要ありません。新石器時代を完全にマスターしています。